地域観光資源の多言語解説整備支援事業

地域観光資源の英語解説文作成のための
ライティング・スタイルマニュアル

Writing and Style Manual
English for
Sightseeing Destinations around Japan

第 7 版

観光庁

2024 年 2 月

はじめに

本マニュアルは、日本の観光地について効果的な英語解説文を作成する制作会社（ライターおよびエディター）のためのマニュアルです。

訪日外国人旅行者にそれぞれの観光スポットの魅力を伝えるには、解説が学びやすく書かれていることが鍵になります。日本の文化、歴史、自然、食等について学ぶ体験が豊かなものになれば、その旅行者は日本を再訪したり、友人に日本への旅行を勧めたりする可能性が高まります。しかし現時点においては、訪日旅行者に向けた解説は十分に整備されているとは言いがたい状況にあります。本マニュアルの目的は、そうした解説文作成に際し、執筆方法や表記の統一的な規準を提示することによって、混乱を防ぎ、執筆と編集の作業の円滑化を期すことです。本マニュアルに沿って作成を進めれば、日本の観光資源を外国人旅行者に、魅力的に、かつわかりやすく紹介することができます。

第 1 部「英語解説文作成の進め方」では、訪日外国人にとって魅力的でわかりやすい英語解説文作成の進め方を概説するとともに、各制作ステップにおける重要な注意点をまとめてあります。第 2 部「執筆ガイドライン」においては、ライターがどのようにすれば良い解説文を執筆できるかについての実践的なアドバイスが書かれています。第 3 部「スタイル・ガイドライン」では、この事業において採用されているスタイル（書式）——スペリング、大文字、ハイフネーション、フォーマット等——の規準が示してあります。これらには、一般的な英語編集の専門的な知見、特に過去 50 年以上にわたって英語媒体の日本関連出版物の作成に携わってきたエディターたちの経験が反映されています。日本全国の観光地についての解説文作成には、この信頼できる規準が有効に機能すると思います。

本マニュアルは、既存の各種ガイドライン、および英文編集における国際的な慣習に準拠したものになっています。各セクションでは、訪日外国人旅行者のための解説文作成における主要な留意点が述べられています。本マニュアルの内容は、観光庁の「地域観光資源の多言語解説整備支援事業」（以下「本事業」）における英語解説文作成に特化したものです。本事業の対象ではない解説文作成については、他の資料、および有識者の見解も参照してください。また本マニュアルは、本事業が継続する場合、内容が改訂される場合があることをご承知おきください。

世界中から日本を訪れる旅行者にとってわかりやすく魅力的な解説の整備に、本マニュアルをご活用いただければ幸いです。

ライティング・スタイルマニュアル

第7版

2024年2月

目次

第 1 部：英語解説文作成の進め方
重要ポイント…… 8
英語解説文作成ステップ…… 9

第 2 部：執筆ガイドライン
文体・文章の基本…… 20
外国人に馴染みのない日本語の扱い…… 22
「定訳」の文脈による調整…… 24
各媒体別ガイドライン…… 25
執筆後のチェック…… 26
Appendix 1
媒体の種類と特徴…… 29
参考資料…… 30

第 3 部：スタイル・ガイドライン
英語語彙表記の規準…… 33
段落仕様…… 33
日本語のローマ字表記…… 34
英語テキスト中の日本語の使用規準…… 37
イタリック体…… 41
言語名の短縮表記…… 43
句読記号…… 43
人名、その他の固有名詞…… 47
大文字…… 50
時代・年代…… 50
数・記号…… 53
金額…… 54

距離・寸法…… 54
時刻・時間…… 55
その他の注意事項…… 55
注意すべき頻出用語…… 57

Appendix 2

ローマ字表記法…….. 58
神社仏閣…….. 59
日本史の時代名…….. 66
植物名…….. 68
動物名…….. 70
食・食文化…….. 71
英文表記：忘れてはならない「６つのルール」…….. 72

第 1 部：英語解説文作成の進め方

■重要ポイント

文化財施設や国立公園などの観光拠点の外国語による案内文は、どの外国語によるものであれ、その場所の歴史や背景を、訪日旅行者に理解しやすい形で提示する必要がある。情報を適切に提供できれば、訪れる人がそれぞれの観光拠点が有する独自の文化的伝統を理解する手助けとなる。本事業における訪日旅行者に向けた解説文は、文法、表現が適正であるとともに、理解しやすく、読み手の学びや感動を深めるものでなくてはならない。

　そのような解説文を作成するためには、以下の点が特に重要である。

１．日本人と外国人旅行者の間に、日本の文化等についてどのような知識・認識ギャップが存在するかを理解すること

日本人向けの日本語の解説文をそのまま英語に翻訳（直訳）するだけでは、意が伝わる可能性は低い。日本の歴史・文化・社会について背景的な知識を持っている日本人なら容易に理解できる情報であっても、外国人旅行者が同じように理解するとは限らない。収集した情報は、外国人旅行者の関心を強く惹くかどうかという観点から精査・選別・配列し、その上で、日本の歴史・文化・社会に対する理解を促す情報を盛り込むよう工夫する。

２．訪日外国人旅行者の興味・関心の把握

外国人旅行者の立場に立って、それぞれの観光資源のどのような特徴、特質が、彼らの興味・関心を喚起、増幅するのかを知ることが、その人たちにとって真に役立ち、魅力ある情報を提供するための鍵になる。

３．媒体特性の考慮

解説文を掲載する媒体の用途、およびその長所と短所を理解し、媒体に応じた書き方をする必要がある。（Appendix 1 の「媒体の種類と特徴」を参照。）読みやすさ、見た目の統一性、（音声媒体の場合）聞き取りやすさに配慮する。小見出しを設ける、段落/インデント方式の一貫性を保つ、各文を短めにする、修飾節や長い修飾句による書き出しを避ける等の工夫が有効になる。

４．クオリティーの高い解説文を作成できる専門人材の確保

本事業の特定のスタイルに則り、要求されるクオリティーを満たす執筆、編集、ファクトチェック等の作業を遂行できるだけの専門性と経験を有する人材の確保が何よりも重要である。また、日本語の情報を基にして英語解説文が作成される場合が多いため、ライターは、日本語の文章の読解、翻訳等の

経験が豊富で、日本での実際の生活や仕事を通じて、日本の文化や社会を深く理解している必要がある。またそれぞれの媒体化にあたっては、解説の見やすさ（音声媒体の場合は、聞きやすさ）を実現するために、日本に関する情報発信と、出版物のデザインに通じた人材を起用することが大事である。

■英語解説文作成ステップ

本事業が推奨する英語解説文の作成ステップは、以下のとおりである。このステップを踏まえながら、作成メンバーがそれぞれの役割を果たすことによって、効率よくクオリティーの高い解説文を制作することができる。

ステップ		タスク	ポイント
事前準備	Step 1	制作チームの組織	経験豊富な人材の起用
	Step 2	•整備対象候補と媒体についての事前調査、現地訪問による地域との調整 •地域との協力関係の構築	•整備対象候補の事前調査 •何を整備対象物に選定するかについて地域と検討 •候補ごとの媒体の選定
取材	Step 3	観光資源の特徴や魅力、諸状況の全体的把握	•現地訪問して地域の有識者や施設関係者に取材 •資料・文献に基づく整備対象候補の調査
	Step 4	（地域と協議の上）整備対象物と制作方針の決定	解説文の想定ターゲット、メッセージ内容、文章構成等の策定
執筆・編集	Step 5	解説文の執筆（詳細は第２部「執筆ガイドライン」参照）	•本「スタイルマニュアル」に則して執筆する •信頼できる事実に基づく情報を精選して執筆する
	Step 6	編集ステージ 1*： •情報の明確さと読みやすさを改善する •文を引き締め簡潔にする •エディター自身の日本に関する知識とリサーチによって、事実と用語をチェックする	•不要な語を削り、必要な言葉を補い、わかりやすさを改善する •客観性と事実中心のスタイルに徹する •ライターと連絡をとりながら事実関係を再確認する •必要に応じて内容監修者に問い合わせる
	Step 7	•ライターは、エディターの指摘に応じて修正し、文章を改善し洗練させる •エディターはライターの修正を確認し、地域のチェックに回せるようドラフトを仕上げる	•正確で読みやすく読む人の興味を喚起する文章に整える •ライターとエディターの連携がきわめて重要

予備的コピーエディティング	Step 8（オプション）	必要があれば、監修コピーエディターに部分的なチェックを依頼することができる	•文章のスタイル、コンテンツの構成と取り扱いが適切であるかをチェック •特定の困難な問題への対応
日本語訳の作成	Step 9	地域の関係者/レビュアーのために英文原稿を日本語に翻訳する	英文から翻訳した日本語訳は、日本人には不自然に思える場合があることを地域に予め了解してもらう
初稿の提示	Step 10	英語と日本語訳の原稿を地域協議会に提出	
地域による執筆内容の確認	Step 11	地域協議会による執筆内容の確認（確認後、制作会社にフィードバックする）	地域と内容監修者が、事実関係が正確であるか、地域の観光促進戦略に適合しているかをチェックする
修正	Step 12	編集ステージ 2： •制作会社は指摘された問題点を解決する •修正した文章をライターにフィードバックし、ライターは確認する	•代替案の提示 •現行のままでよいと判断される場合は、その理由を丁寧に説明する
校閲	Step 13	•監修コピーエディターは文章が所定のスタイルに則しているかを確認 •読みやすさ、文章の質、表記の統一、文法、事実関係等についてチェック	•書き直し・修正を行い、解説文の品質と内容に関する残された問題点を解決 •不明瞭な部分や過剰な詳細など不適当な箇所を指摘
最終調整と校正	Step 14	編集ステージ 3： •エディター／ライターによる修正箇所の確認、問題点の解決、フォーマット・チェック、ファイルのクリーンアップ •最終校正	必要であれば、監修コピーエディター（Step 13）と適宜協議する
校了	Step 15	所定の形式に整える	
納品	Step 16	地域協議会へ最終稿を納入	「最終チェックリスト」（p. 18）参照

（＊）エディターは、解説文の品質に関し、執筆ステージから最終的な納入まで責任を持つ。編集は、Step 6、12、14 の 3 段階で必要になる。

《事前準備》

Step 1：制作チームの組織

解説文作成に携わる各メンバーは、対象となる観光拠点の文化的価値や背景だけでなく、日本の観光地や文化全般について豊富な知識を持っている必要がある。また、英文の執筆に堪能であることも求められる。

専門人材の名称	役割	人材要件	その他の基準
ライター	•地域からの提供資料や現地取材の中で、情報を取捨選択し、旅行者視点による解説文を新規に書き下ろす •地域から提供された資料等をそのまま英語に翻訳する作業ではないことに注意	英語母語者	•日本語資料を読むことができる人材が強く求められる •関連分野に詳しく、英文執筆の経験が豊富である •日本の観光地を海外に向けて PR した経験がある •日本語の情報を正しく理解して英語に翻訳できる
エディター	•ステージ 1：ライターとともに現地取材を行い、ライターが書き下ろした解説文について、内容の正誤や適否を確認しながら、よりわかりやすい解説文へと編集する（Step 6） •ステージ 2：地域協議会からのフィードバックに応じて文章を修正する（Step 12） •ステージ 3：Step 13 の監修コピーエディティングの修正を確認し、問題を解決し、文章を仕上げる（Step 14）	英語母語者	•日本の自然、文化、歴史、社会に精通している •提供された日本語資料を読んで理解する能力を有することが強く求められる •関連分野に詳しく、編集の経験が豊富である •日本の観光地について海外に向け情報発信した経験がある
内容監修者*	•当該地域の内容に関する専門知識を持つ専門家として、ライターとエディターに執筆内容に関するアドバイスを行う •ライター、エディターが作成した文章をチェックし、内容と事実の正確さを確保する	英文を読んで理解し、内容の正確さを判断できる	•整備対象物に関する有識者／専門家（該当分野の著書がある者、郷土史家、学芸員、教育・研究者等） •文化財分野についてはとくに高い専門性が求められるため、実績等を考慮し、慎重に人選を行う

	•人名、場所の説明、（特殊な）日本語の英語による注釈等のチェック •より正確で掘り下げた情報を担保するため、ライターとエディターの現地取材に同行することが推奨される		
監修コピーエディター	•文章が、本「スタイルマニュアル」に則って記述され、読みやすく魅力的なものになるよう編集する •ライター／エディターが作成した解説文について、文章が所定のルールに従っているか、疑わしい記述がないかをチェック、可読性と文法・表記の統一等を確認	英語母語者	文章が適正であるか、一貫性が保たれているか、内容は正確か、見落としがないか等を精査する作業に習熟している
校正者	ライター／ エディターが作成した解説文について、誤字・脱字等がないかを最終確認する	英語母語者	•誤字・脱字など、文字の誤りを正す校正作業に熟練している •日本に関する知識が豊富である
ディレクター	地域と専門人材（ライター／エディター）の間に入り、両者のコミュニケーションが円滑に行われるよう調整する	英語・日本語の両方で対応可能な人材	事業の執行・管理の経験が豊富で、地域と制作チームとのコミュニケーションを円滑化できる能力がある

（＊）内容監修者は複数であることを妨げない。

出典: Editors Canada, *Professional Editorial Standards* (2016).
https://www.editors.ca/sites/default/files/pes-2016-formatted-for-web_0.pdf

Step 2：整備対象候補と媒体の検討・調整

制作チームが組織されたら、取材に向けて地域協議会との打合せの実施を申請する。この事前打合せにより、整備対象候補の全般的特徴、（アクセス、料金、施設、設備等）訪日外国人訪問者にとっての諸条件・状況の確認がで

き、さらに、地域協議会と制作チームおよび内容監修者が一堂に会することで、関係者が共通の理解と認識を持ち、取材・執筆・事実確認等の作業における協働性が高まり、プロジェクトのより円滑な運営が期待できる。

１．事前打合せ前の準備

整備対象候補や当該地域に関するパンフレット、冊子、ウェブサイト等をよく読み、知識と親しみを深めておく。

２．協議事項

(1)媒体の選定

解説文が最大限に活用されるためには、情報が媒体（解説板、ウェブサイト、パンフレット、音声ガイドなど）にふさわしい提示のされ方がなされている必要がある。地域が想定している媒体を確認する。
（Appendix 1「媒体の種類と特徴」参照。）

(2)解説文整備のための主要な確認・検討ポイント

•整備対象物候補の優先度の検討
-訪日外国人旅行者がよく訪れる観光スポット
-国宝・重要文化財等、文化的価値の高い対象物
-ビジターセンターや展望台など、総合的な観光情報を得やすい施設を備えた観光スポット
-入口、順路案内板などの整備されている観光スポット

•既存の英語解説文の有無の確認
-既存の英語解説文がある場合、それが日本人向けの解説文を英語へ直訳したものになっていないかをチェック
-既存の解説文にスタイル／トーンをどの程度合わせるべきかを確認
-地域にすでにスタイルマニュアル等があるかどうかを確認

•地域の観光戦略との調整
観光スポットを個別に紹介するというより、地域全体を総合的に整備していくという観点をもつ

•訪日外国人旅行者の視点の重要性
それぞれの観光拠点が海外からの旅行者の目にどのように映るか、また外国人旅行者にとってその地域の最大の魅力は何なのかについて、地域の関係者の理解を促す。（たとえば建築物の修復についての細かな情報等は、外国人旅行者の関心の対象にはなりにくい。）

(3)内容監修者についての確認

候補者の専門分野および実績が適格であるかどうかを確認する。

(4)取材に向けた調整

•取材日程・行程の策定
•取材日程・行程表を地域協議会へ提出
•整備対象物候補について取材時に説明してくれる地域担当者の確認

《取材》

Step 3：観光資源の特徴・魅力の把握

(1)整備対象物候補についての情報収集

•情報収集には、原則としてライターとエディターの現地取材を含める。
•正確で有用な解説文のために、観光スポットの文化的価値と背景的情報を十分に理解する。
•取材に際しては、整備対象物候補について重要かつ最新の情報を提供できる現地の有識者やガイド等の協力を得る。

(2)取材・インタビュー対象者の選定

分野	取材・インタビュー対象としての適任者
文化財	施設管理者、社寺関係者、学芸員、研究者、館長
自然	自然保護官、研究者、地域認定ガイド
観光	施設管理者、運営団体、地域認定ガイド

Step 4：整備対象物と制作方針の決定

対象となる読み手を明確にイメージして、整備対象物を地域協議会とともに検討して決める。

•制作会社は、外国人旅行者の視点から、取材時に把握した整備対象物に関する情報、および地域の諸条件をよく勘案し、解説文の制作方針・提案を地域へ伝える。
•整備対象から除外する対象物

制作会社は、想定する外国人旅行者が関心を持つとは考えにくい観光資源については、その明確な理由を地域へ伝え、整備対象から除外する。

《執筆・編集》

Step 5：解説文の執筆

自然で客観的な解説文でなければならない。読む人が、難しい言葉や言い回しに躓くことなく、なめらかに読める文章を作成する。文構成は筋が通っていて、流れが捉えやすいこと。言葉は簡潔、かつ魅力的であること。ただし、実用的な情報だけに留めず、可能な限り訪日外国人が訪問したくなる観光資源の魅力的な要素を含めるよう留意すること。

詳細は、第２部「執筆ガイドライン」参照。

Step 6：編集ステージ１

１．わかりやすさの追求

エディターは、文章、情報、媒体との適合性の観点から解説文の品質をチェックし、内容、構成、文体について改善案を提示するとともに、解説文の内容ができるだけ明確でわかりやすいものになるよう編集する。

- 内容が論理的に構成されているか（全体像→詳細、主要な情報→補足的情報の順になっているか、時系列に沿った説明になっているか)。数値関係の情報（距離、寸法など）や（国宝、文化財など）指定の情報が、冒頭などの目立つところにではなく、参考情報として適切な場所に配置されているか。
- 文章の長さは適切か。優先度の高い情報が精選され、できるだけ少ない語数で多くの情報が簡潔にまとめられているか。
- 冗長な文、構文が複雑な文はないか。さっと読み取れるシンプルな文構造になっているか。
- 文章が引き締まっているか。すべての語の必要性を確認する。反復使用の言葉、不要な詳細、意味のない語などを削除する。名詞と動詞が主体である文章を心がける。
- 情報源は信頼できるか。他の資料で裏づけが取れるか。
- 解説文は、対象地域の観光促進戦略に適ったものになっているか。
- 文章中に事実として書かれたもの（人物情報、年代・日付、動植物の名称、地名、寸法等の数値など）は正確か。

（注）解説文に関する最終チェックポイントについては、Step 15 参照。

２．ファクトチェック

解説文に記載される事実は、何を措いてもまず正確でなければならない。エディターは、事実の記載情報が正確であるかどうか（また適切な表現形

式になっているかどうか）を何度も確認すること。年代・日付や人物、地名などの情報に疑義がある場合は、必ず内容監修者に相談する。

Step 7：文章とスタイルの推敲

ライターは、エディターの修正およびコメントを承けて、解説文の質をさらに高めるよう推敲する。

- 読みやすく、読んで心地よい文体であるかを確認する。
- 声に出して文章を読み、不自然な、ないしわかりにくい表現を摘出して修正する。
- 文章内のデータや数値をダブルチェックする。
- 名前をダブルチェックする。
- 単語やフレーズの表記がスタイルガイドラインに則していることを確認する。
- 誤字・脱字がないかを確認する。

《予備的コピーエディティング》

Step 8：監修コピーエディターへのチェック依頼（オプション）

制作会社が解説文作成のために新規にライターまたはエディターを採用した場合、日本語訳の作成と地域協議会のチェックの前に、準備した解説文のサンプルを監修コピーエディターがチェックすることが望ましい。監修コピーエディターは、スタイルをチェックし、適切な編集の例や、文章および内容についてのコメントを、参考のために提示し、文章のさらなる編集（たとえば、冒頭部の工夫、読みやすさと流れ、構成、適正な文法、スタイル・ガイドラインの順守など）を促す。監修コピーエディターのアドバイスは、文章が、観光庁の解説文に求められる文章のクオリティーの基準に達していること、および本マニュアルに則していることを期すためのものである。

《日本語訳の作成》

Step 9：（地域レビューのための）日本語訳の作成

地域協議会がレビューを行うための資料として、解説文を日本語に翻訳する。名前と特定の用語を正確な日本語で表現するように注意する。また、翻訳作業中に内容の正確さに関して疑義がある場合は、ライターに照会する。（英語原稿には、ライター／エディターからの地域に対する質問が日本語で加えられている場合があるが、それはそのまま地域に伝えられるようにする。）

《初稿の提示》

Step 10：初稿を地域協議会に提出

- 解説文制作チームは、できあがった英語原文とその日本語訳の原稿を、当該地域協議会に提出する。
- 原稿は、コメントと修正を加えるのに適した形式にし、複雑なレイアウトを避ける。Windows と Mac 間で互換性のあるシンプルなページ設定にする。

《地域による執筆内容の確認》

Step 11：執筆内容の確認

地域協議会、および専門家である内容監修者が原稿をレビューし、解説文中の事実が正確であるか、内容が地域の観光促進戦略に沿っているかを確認する。フィードバックの方法としては、（a）MS Word のコメント機能を使用した方法と（b）解決すべき問題、説明、提案するソリューション等を箇条書きにした観光庁ファクトチェック・シート（Excel 仕様）による方法がある。（ファクトチェック・シートのフォームは観光庁のサイトからダウンロードできる。）

《修正》

Step 12：編集ステージ 2（地域協議会から提示された問題点への対応）

- （制作会社の）エディターは、地域協議会からのフィードバックの中で指摘されている問題点を確認し、修正すべき箇所を修正する。
- 指摘事項について現行のままでよいと判断されるものについては、地域協議会に対してその理由を丁寧に説明する。必要に応じて監修コピーエディターに相談する。
- エディターは、修正すべき箇所を修正したのち、さらなる改良を加えたテキストをライターに提示する。

《校閲》

Step 13：監修コピーエディターによるチェック

監修コピーエディターは英文テキストをレビューし、読みやすさ、文章のスタイル／トーン、内容の適正さをチェックし、文法、一貫性などについて問題があれば、それを指摘して修正する。本事業の求める基準に明らか

に達していないと判断されるテキストについては、制作会社に返送し、書き直しを求める場合がある。

《最終調整と校正》

Step 14：編集ステージ 3（変更の承認、指摘問題点の解決、最終校正、フォーマットチェック、ファイルのクリーンアップ*）

監修コピーエディターから制作チームに戻された原稿について、ライター／エディターは、変更箇所が適切であればそれを承認し、文章をさらに推敲する。段落仕様を最終チェックして原稿を仕上げる。

（*）「クリーンアップ」とは、すべての指摘問題点の解決、すべてのコメントの削除、フォーマッティングの問題がないことの確認、二重スペースやその他の修正の跡が残っていないことの確認、ハイフンとエンダッシュの使用の適正さのチェック、媒体に合わせた段落のフォーマットの確認などを意味する。

《校了》

Step 15： 最終チェック

完成原稿を最終チェックし、所定の提出様式に整えて納入する。

納入前の最終チェックリスト：

□1. 各解説文の冒頭部は魅力的であるか。伝えたいことが簡潔・明確に書かれているか。訪日外国人旅行者にとって有益な情報が入っているか。

□2. 文章は自然かつ論理的で、読者が困難なく内容を理解できるか。

□3. 日本語の用語の使用は、目的地を初めて訪問する旅行者にも助けとなる重要な用語に限定され、思慮ある判断に基づいているか。

□4. 文章は学術臭がなく、一般の読者向けに書かれているか。興味深く読める内容になっているか。

□5. 客観的で適度にフォーマルなトーンが一貫して保たれ、くだけた口語的表現や誇張表現、誇示するような表現が使われていないか。

□6. 語彙、構文は平易で、英語を母語としない読者にも通じるか。

□7. 事実関係（単数/複数の区別、方位、人物や事物についての情報など）は確認済みであるか。

□8. 日本語資料から翻訳された部分は、十分にこなれた自然な英語になっているか。

□9. 使用媒体（ウェブ、パンフレットなど）に適したスタイルであるか。

□10. 文章に残っている受動態、従属節構造、曖昧表現等は本当にやむを得ないものであるか。

第２部：執筆ガイドライン

本プロジェクトが目指している解説文は、訪日外国人旅行者の関心を惹く有用な情報を、平易かつ生気ある文体で、客観的、明確・簡潔に述べた解説文である。また解説文は媒体特性に合わせなければならない(Appendix 1 の「媒体の種類と特徴」参照)。ライターは、第 3 部「スタイル・ガイドライン」を熟読した上で執筆すること。

■文体・文章の基本

(1)訪日外国人視点の重視

•対象となる読み手を明確にイメージする。このイメージと地域が想定する外国人旅行者像が一致していることを確認する。

•読み手が英語母語者とは限らないことを常に意識する。

•想定する外国人旅行者が関心を持つと考えられるトピックについて文章を作成する。自分が読み手だったら何を解説してほしいかを想像し、取材で得た情報に基づき、さらに掘り下げた情報を提供できるように努める。

(2)明確で簡潔な文章

情報を正確かつ明確に伝えることに主眼を置く。観光業界でよく見られるような、広告を目的とした口語表現やくだけた調子の文体は避ける。本事業で作成される解説文は、かなり長期にわたって利用され、様々な文化的背景と興味・関心を持って訪れる幅広い年齢層の読み手の目に触れるものとなること、観光庁の後援による事業であることを念頭に置かなければならない。

(3)平易で客観的な文体

•平易な語彙で事実解説に徹するとともに、生彩ある文体を用いる。冗語を省き、必要な語のみで文を構成する。受動態はなるべく使わず、能動態を用いる。複雑な構文を避け、非英語母語者にも読みやすく、また他言語への翻訳がしやすい解説文にする。

例：

（×）These tiny fish are endemic to the Okinawan islands.（“endemic”は、誰にでもわかる平易な語彙ではない）

（○）These tiny fish are native to the Okinawan islands.

•感情的・主観的な表現は控え、客観的な表現に徹する。書き手本人の価値判断を伴う描写は避ける。

例：

（×）The sight is so beautiful that in 1990 the park's cherry trees were selected as one of the "100 Best Spots for Cherry Blossoms."（beautiful が主観的表現になっている）

（○）The park is one of Japan's "100 Best Spots for Cherry Blossoms."

（×）The Mizuki Shigeru Museum is well-produced, with pleasant surprises at every turn.（pleasant が感情的・主観的表現になっている）

（○）The Mizuki Shigeru Museum honors the spirit and career of the artist with exhibits that inform—and often surprise.

(4)生彩と格式を兼備した文体

•読み手を惹きつける文調を有しつつ、日本政府機関が監修した解説文にふさわしい格式をもつ文体を心がける。

•「売り込み」調のトーンは避け、客観的な情報提示の姿勢に徹する。

•口語表現（"X place boasts...," "head for," "the get-go," "a hit with," "X showcases Y"など）や短縮形（"It's…" や "It would've…" など）は、フォーマリティー上の問題があり、非英語母語者にとっては却ってわかりにくいことがあるので使用しない。

•過剰に使われがちな言葉（"actually"; "incredible"; "worthwhile"など）や陳腐な表現（"is home to"; "a stone's throw away"など）に注意する。

•排他的な表現（例："the Japanese," "locals"）に注意する。

•物を主語とする文では、専ら人間に対して使われる動詞は使わない。たとえば、寺社を主語にするとき、動詞に "house" や "enshrine" を使うのは許容できるが、"venerate" は使うべきではない。同様に、たとえばある宗教施設が神仏習合を行っている場合、動詞に "practice" を使うのは不適切である。また、何かが「方法」によって生み出されるという「方法」の擬人化も避ける。（"the only method capable of producing 〜"など）

•二人称主語（“You”）の使用には慎重にならなければならない。（詳しくは、第３部「二人称代名詞（“You”）の慎重な取り扱い」（p. 56 参照）
•三人称の総称主語（“people” や “they” など）の使用にも注意が必要。場合によっては、読み手に疎外感（不快感）を与えることがある。また、they をジェンダーフリーの立場から、単数主語の代名詞として使用する傾向が一部にあるが、それは社会に全面的に受け入れられている用法ではないことに留意する。
•訪問者を指す “visitors” という言葉には注意が必要。“visitors can…” とか “visitors may…”といった構文は避ける。ただし、注意事項や警告を与える場合は使用してもよい。
•過度の一般化（generalization）に陥らないよう注意する。
例：“Everyone loves fireworks, and the annual display at Miyajima is no exception.”（「誰もが花火が好き」が、過度の一般化になっている）

(5)構文／構成

•冒頭の段落では読み手の興味を惹きつける必要がある。解説の対象を生き生きと描き出すために、一語一語を有効に働かせた文章となるよう工夫し、推敲を重ねる。
•文法構造は英語として自然なものにし、日本語からの翻訳調を避ける。
•修飾節や長い修飾句を文頭に置くのは避ける。
例：
（×）“Not previously known as a sightseeing spot, Omiya became a hit with visitors with the opening of Omiya Park in 1885.”（“Not previously known …spot” が文頭に置かれた長い修飾句になっている。また “a hit” は口語表現）
（〇）Omiya became a popular sightseeing spot when Omiya Park opened in 1885.

■外国人に馴染みのない日本語の扱い

ローマ字による日本語の使用はなるべく控える。英語で説明しようのないもの、その日本語を知ることが観光対象物の理解と鑑賞に寄与すると判断されるものについてのみ用いる。

例：

（×）In fact, the town was originally known as “Seki no Jizo Juku,” with “Jizo” as part of its name. The name “Seki” comes from the Suzuka Barrier (Suzuka no Seki), the fortified checkpoint at Nishi no Oiwake that was one of three barriers erected during the Nara period (710–794) to protect the region.

（○）The name “Seki” comes from the Suzuka Barrier (Suzuka no Seki), the fortified checkpoint at the west end of town that was one of three barriers erected during the Nara period (710–794) to protect the region around the imperial capital.

（×）In the eighth century, China’s Tang dynasty (618–907) was one of the most prominent political and cultural centers in Asia. Between 630 and 894, Japan sent 19 envoy ships called *kentoshi bune* to China for purposes of diplomacy, research, and trade. . . . For centuries, these envoys (*kentoshi*) returned bearing goods and ideas that profoundly impacted life in Japan.

（○）In the eighth century, China’s Tang dynasty (618–907) was one of the most prominent political and cultural centers in Asia. Between 630 and 894, Japan sent 19 envoy ships to China for purposes of diplomacy, research, and trade. . . . For centuries, these envoys returned bearing goods and ideas that profoundly impacted life in Japan.

•外国人に馴染みのない(日本語の)用語や名前を使うときは、読み手の理解を促す情報を補足する。

例：

-hot-spring inn (*onsen ryokan*)
-leading Western-style painter Kuroda Seiki (1866–1924)
-Waseda, the prestigious university founded in 1882,...

•英語と誤認しやすい和製英語に注意する。

例：

タレント⇒ TV personality

バイク⇒ motorbike

ハンドル⇒ steering wheel

洋蘭 ⇒ tropical orchid または species of orchid developed in Europe

（×Western orchid）

•不自然でない限り英語の訳語を優先し、日本語のローマ字表記を括弧に入れて添える。

例：浄瑠璃 ⇒ puppet theater (joruri)

•日本語の英語による説明が長くなる場合は、日本語を先にする。

例：*kotatsu* (a table equipped with a heating device)（英語の説明が長いので日本語を先に出す）

•文中に「注解的な説明」を自然に盛り込み、読み手の理解を助ける（例：*hanagatuo* bonito flakes）。JAANUS や *Kodansha Encyclopedia of Japan* 等、権威ある参考文献で用いられている注解表現を採用する。

•歴史上の人物名を出す場合は、生没年を括弧に入れて併記し、文章中の他の箇所でその人物に関する説明がない場合は、簡単な説明を添える。

例：
-Honda Seiroku (1866–1952), park and forestry expert
-poet Matsuo Basho (1644–1694)

•日本語の固有名詞の名称が、文脈上で意味を持っている場合は、文中でその意味を補足する。

例："Sango Yuntaku-Kan Visitor Center supports the preservation of coral reefs."（「さんごゆんたく館」は、日本人にはどんな施設か、名前を見ただけでほぼ推測できるが、外国人にはできないので補足説明が必要）

■「定訳」の文脈による調整

日本語の「定訳」となっている英語であっても、文脈によっては不適切となる場合があることに注意する。

例：

「おみやげ」に相当する英語は souvenir だが、日本語では食べ物にも「おみやげ」が使えるが、英語の souvenir は、食べてなくなってしまうものには普通使わない。

観音や地蔵の「慈悲」というとき、定訳は mercy になっているが、英語の mercy にはキリスト教的観念が染み込んでいるので誤った印象を与えかねない。むしろ compassion を用いたほうが適切。

■各媒体別ガイドライン

(1) 案内（解説）板

- 各段落の冒頭はインデントを施す。（段落間を１行空けることはしない。）
- タイトルの後、および空白行の後の最初の行は左揃えにし、インデントは施さない。
- 外国人旅行者が現地で読むことを想定する。
- 文化的・歴史的事実、重要な背景的情報を内容に盛り込む。
- 訪問者の視線をまず近くにあるものに誘導するよう情報を提示する。
- まず読み手の目の前にある建物や彫像等について述べる。次に背景を説明する。その後で周囲の建物や関連スポットについての情報を付け加える。
- 時間的に前後する説明は避け、時系列に沿う叙述にする。

(2)ウェブサイトとデジタル案内（解説）文

- 文章量は場合によって異なる。長くなりすぎないように注意する。
- インデントは用いず、段落間を１行分空ける。
- 長いセクションは小見出しをつけて分割する。
- 導入部は読み手の関心を惹くよう工夫する。最初に観光対象物についての概要を簡潔に述べ、次になぜその対象物が重要なのかを説明し、その後アクセスなどの諸情報を付加する。
- 生気と熱意が感じられる文章は望ましいが、表現が感情的・誇張的にならないよう注意する。

(3)印刷物

- 文章量は場合によって異なる。原稿が印刷物の仕様に合わせて調整されることがある。
- 各段落の冒頭にインデントを施す。（段落間を１行空けることはしない。）
- タイトルの下、および空白の後の最初の行は左揃えにし、インデントは施さない。
- 現地で読まれるだけでなく、訪れる前や訪れた後にも読まれる可能性があることに留意する。

•執筆対象の背景、見所、逸話、名産品、アクセス情報等を網羅する。

(4)音声ガイド・AR（拡張現実）のスクリプト

•長さはそれぞれ異なるが、各セクションの音声部分は、ほとんどの場合 1 分間に満たない。
•文章の長さを短くし、複雑な構文は使わない。
•日本語の長音にはマクロン（長音符）を付し、ナレーターが正しく発音できるように配慮する。
•聞き手にとって聞き取りづらい、または理解しづらい可能性がある言葉は使用を控える。
•聞き手の関心を惹きそうなことを中心に解説する。
•情報を付加することでさらにわかりやすくなる箇所がないか検討する。
•原稿を見直す際は、実際に声に出して読んでみる。

■執筆後のチェック

•想定する外国人旅行者が尋ねそうな質問に答えているか。
•想定する外国人旅行者が興味・関心を持ちそうな自然、歴史、動植物などについての情報を提供しているか。
•想定する外国人旅行者にとって重要な順に情報を提示しているか。
•想定する外国人旅行者が知っていない可能性のある、日本人にとって自明な暗黙の前提を言語化しわかりやすく説明しているか。
•想定する外国人旅行者の日本の歴史・文化への理解を促すものになっているか。
•ファクトチェック*

ライターは、文中の事実として記述されていることが真に正確であるかどうか、複数のソースを用いて確認するとともに、使用した資料の書誌情報を記録しておく。

(*)ファクトチェックの最終的責任は、地域協議会および内容監修者にあるが、ライターも、執筆内容がすべて事実であるかどうかを確認する必要がある。執筆にあたり、事実関係について不明点があった場合は、そのまま放置せず、内容監修者に問い合わせること。

■Appendix 1

■媒体の種類と特徴

解説文は、使用媒体の特性に合わせて作成する。また、効果的な解説文を書くためには、読み手がこの情報をいつ、どこで、どのような形で読む（あるいは、聞く）のかを考え、文章のスタイルと内容を調整する必要がある。

媒体の種類	対象者	特徴	留意点
プロモーションビデオ	来訪予定者	視覚中心に訴える	読み手の心に響く短いフレーズを選択する
ウェブサイト	来訪予定者と現地訪問者	•全体像を提示できる •詳細な情報を掲載できる	•来訪を促すために、興味を増進させるような話や、魅力的なモデルコースを紹介する解説文が求められる •来訪前の閲覧者に対し、幅広く詳細な情報を提供する •現地の案内板では足りない情報を QR コード等によってリンクさせて補うことが可能
パンフレット	周遊コースや全体像について知りたい現地訪問者	•携行でき持ち帰れる •絵や写真とともに、対象についての簡潔な説明を掲載できる	•現地の解説板では足りない情報を補うことが可能 •使用言語（英語、中国語 etc.）ごとにレイアウトを考えるのが望ましい
案内（解説）板	現地訪問者	目の前の観光資源について情報を提供する	各解説は 100～250 語を目安にする
音声ガイド	鑑賞しながら解説を聴きたい現地訪問者	情報を語って聞かせることができる	•限られた時間の中で耳から聴いて理解できる範囲に情報量を制限する •簡単な語彙とわかりやすい表現を用いる •書き言葉ではなく話し言葉で書く •解説文を、広い文脈と絡ませて書く
ガイドツアー	ガイドによる専門的解説を聴きたい現地訪問者	対象について、訪問者の興味に合わせた説明が提供できる	ツアー参加者の国籍や特性、人数等、その時の状況に応じた解説の準備が必要
図録	•より専門的な解説を知りたい現地訪問者 •リピーター	•パンフレットより詳しい知識を盛り込むことができる •携行でき、持ち帰れる	歴史や美術に関するより詳細かつ専門的な知識が盛り込まれるため、専門家に監修してもらう必要がある

■参考資料

本「スタイルマニュアル」は、以下の資料を参考にして作成された。

（注）本規程は、以下の資料で推奨されている規程に優先する。

観光庁(2014)：「観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン」
http://www.mlit.go.jp/common/001029742.pdf
•多言語での表記方法
•一般的なフレーズ／表現に対する英語、中国語、韓国語の対訳
•標識やサインのデザインと設置方法

文化庁・観光庁(2016)：「文化財の英語解説のあり方について」
http://www.mlit.go.jp/common/001142178.pdf

環境省(2019)：「多言語表記対訳語集」
https://www.env.go.jp/nature/14_tagenngo%20hyouki%20taiyakushu.pdf
•自然公園管理に関する用語全般
•標識や指示に使用される一般的な表現
•地名、説明、案内の表記の統一

国土地理院(2016)：「地名等の英語表記規程」(*Notation Rules for Place Names in English*) (英語版： http://www.gsi.go.jp/common/000138865.pdf)
•自然遺産名
•住所表記
•施設・機関名等

Dictionary by Merriam-Webster.
https://www.merriam-webster.com/

University of Chicago Press (2017): *The Chicago Manual of Style* (CMOS). 17th ed.
https://www.chicagomanualofstyle.org/home.html

Society of Writers, Editors, and Translators (2018): *Japan Style Sheet* (JSS).
http://japanstylesheet.com/wp-content/uploads/2018/12/JapanStyleSheet_3rdEdition_SWET.pdf

Sophia University (2018): *Monumenta Nipponica Style Sheet*.
http://dept.sophia.ac.jp/monumenta/pdf/MN-Style-Sheet-Sptember-2018.pdf

Encyclopedia of Japan. 9 vols. Kodansha, 1983.

Japan: An Illustrated Encyclopedia. 1 vol. Kodansha, 1993.

JAANUS: online *Dictionary of Japanese Architectural and Art Historical Terminology*.
http://www.aisf.or.jp/~jaanus/

National Institutes for Cultural Heritage: *Style Manual for English Texts: General Conventions*.
http://doi.org/10.24484/sitereports.115465

Agency for Cultural Affairs: *Bunka-Cho Art Platform Japan Translation Project Style Guide.*
https://contents.artplatform.go.jp/wp-content/uploads/2021/02/CACJ_translation_project_20210224.pdf

Tokyo National Museum: *Japanese to English Translation at the Tokyo National Museum: A Guide to Tombstones and other Gallery Labels*.
https://webarchives.tnm.jp/research/details?id=2041

Library of Congress: *Romanization Guide for Japanese*.
https://www.loc.gov/catdir/cpso/romanization/japanese.pdf

Editors Canada: *Professional Editorial Standards.*
https://www.editors.ca/publications/professional-editorial-standards-2016

第３部：スタイル・ガイドライン

■英語語彙表記の規準

英語の語彙のスペリングと、ハイフンによる区切り箇所（音節の区切り）については *Merriam-Webster* の辞書（書籍／オンライン版）を規準とする。この辞書にはメートル法の単位の短縮形一覧表など、ライターにとって有用なツールも付録として掲載されている。本事業では、アメリカ式スペリングを採用するが、観光拠点がイギリス式を指定する場合はそれに従う。

《アメリカ式》	《イギリス式》
center	centre
civilization	civilisation
color	colour
defense	defence

日本語の語彙で英語に入っているものがかなりあることに注意。相当以前から英語として定着しているものもあれば、anime のように比較的近年に加えられたものもある。いずれにせよ、*Merriam-Webster* の辞書に採録されている日本語については、イタリック体にせずに、ローマン体（立体）のまま用いることができる。

例：

anime, daimyo, kabuki, kami, manga, matcha, miso, ninjutsu, noh, samurai, shogun, shoji, sumo, sushi, tatami, tofu, tokonoma, torii, ukiyo-e

しかしどちらにするかは、最終的には、ライター／エディターの判断に委ねられる。ここはイタリック体にしたほうが解説文の読み手にとって読みやすくなると判断される場合はイタリック体にしてもよい。（たとえば、襖、障子、床の間の３つが単一の解説文に一緒に出てきた場合、英語の辞書にない fusuma だけをイタリック体にするのは不統一に見える。そうした場合は３つすべてをイタリック体にすることが適当と判断してもよい。）

■段落仕様

(1)自動フォーマットの不使用

原稿のテキストはインデント、箇条書き、段落番号といった自動フォーマット機能を使わず、シンプルな書式で整える。フォーマット機能を使っていない原稿の方が、印刷物デザインソフトに取り込む際により扱いやすい。（またフォントについても、Times、Times New Roman、Palatino など、読みやすいものを用いる。Century は使わないこと。原稿の段階では、テキストはエディターとチェッカーにとって可能な限り読みやすいことが必要である。）

(2)案内（解説）板とパンフレット等の印刷物

案内（解説）板、および印刷物を媒体とする文章においては、最初の段落を除き、各段落の最初の行にインデントを施す（段落間を 1 行空けることはしない）。段落のインデントは Tab を 5mm に設定する。またタイトル（ないし小見出し）の後の最初の行、および空白の行の後の最初の行は、左揃えにし、インデントは施さない。

(3)デジタル案内（解説）板とウェブサイト

デジタル案内（解説）板、およびウェブ上の文章は、すべての段落において、最初の行であってもインデントを施さず、段落間を 1 行空ける仕様にする。段落間のスペースは、通常の 1 行分とし、特別の設定はしない。

■日本語のローマ字表記

英語による解説文である以上、日本語（ローマ字表記）の使用は必要最小限に留める。英語による表現でほぼカバーできる内容であれば、日本語を敢えて使う必要性はまったくない。ほとんどの外国人観光客は日本語に馴染みを持っておらず、見慣れない言葉に出くわすと、読む流れが妨げられてしまう。読み手の日本文化・歴史・建築物についての理解を促す意義があると判断される場合に限って、日本語を取り入れることを考慮する。どの頻度であれば日本語の使用が認められるかについての定則はない。「ケース・バイ・ケース」であり、「少なければ少ないほど良い」。

　ローマ字による翻字法としては、広く受け入れられているヘボン式を用いる。ヘボン式、および特殊な音のローマ字表記については、*Japan Style*

Sheet の表を参照。込み入った疑問点は、米国議会図書館のローマ字表記のページ（URL は p. 57）などを参照する。監修コピーエディターに質問することもできる。

(1)撥音「ん」のローマ字表記

- “b”、“m”、“p” の前の「ん」は、“m” ではなく“n” で表記する。一部の広く受け入れられている例外を除き、この原則に従う。

《通常の場合》	《例外》
出版物 *shuppanbutsu*	昆布 *kombu*
日本橋 Nihonbashi	天ぷら tempura (英語の語彙になっている)
記念日 *kinenbi*	新聞 *shimbun* (例：Asahi Shimbunsha)

- 「ん」の直後の音が母音か “y” の場合、“n” との間にアポストロフィ (’) を挿入してもよい。
  例：Koizumi Jun’ichiro[小泉純一郎]; *tan’i* [単位]; *kin’en* [禁煙]

(2)促音「っ」

促音の「っ」の場合、通常は Hokkaido（北海道）のように子音を重ねることによって表すが、抹茶（まっちゃ）の場合のように、小さい「っ」の後に「ち」音が続くときは、通常の場合のように cc (×maccha) と “c” を重ねることはせず、tch (〇matcha) のようにつづる。
（例：具知安(くっちゃん)町 Kutchan-cho; 乙知志(おっちし)岬 Otchishi-misaki, Cape Otchishi）

(3)長母音(マクロン不使用の原則と特例)

英語の文章中、日本語で「おお」「おう」「うう」「しょう」「しゅう」等で表記される長母音をローマ字に移す際、マクロン（長音符）を使うかどうかは注意深く決める必要がある。マクロンを使うか使わないかの判断基準は、それが長音であることを特記する必要があるかどうかによる。

本事業においては、「原則として、人名や地名を含め、日本語のローマ字表記にはマクロンは使うべきではない」と定めている。日本についての知識がそれほど多くないと想定される大部分の訪日外国人旅行者にとって、観光地の解説文で、見慣れない記号（マクロン）を見ると、意味がわからず、かえって困惑させるだけだと考えられるからである。音声ガイドの場合に限り、ナレーターの便宜のためにマクロン使用が推奨される。

ただしマクロンの使用については、下のように賛否両論があり、地域／ライターが賛成論の根拠に基づいてマクロンの使用を強く望む場合は、使用してもよいこととする。ただし、恣意的な、または統一性を欠くようなマクロンの使用は避けるべきである。またマクロンを用いる場合は、ファイルの最初に日本語でその旨を明記し、後の工程で原稿を扱うエディター／デザイナーがその表記方針を承知し、それに従えるようにすること。

《賛成論》

- 歴史、美術関係のテキストにおいては、日本語の発音の正確さは重要であり、美術館・博物館や世界遺産を訪れる外国人の中には、専門的知識を有する人たちも含まれている可能性がある。実際、日本に関する学術的・専門的な出版物、また一部の主要な美術館（ボストン美術館、メトロポリタン美術館、大英博物館、ミホミュージアム、京都国立博物館など）の日本作品のコレクションについてのカタログや解説の英文中では、マクロンが広く使用されている。
- 一部の歴史的・芸術的観光資源についての解説では、訪問者が単なる観光以上の知識を求めていることも考えられる。このような場合においては、発音の区別をより正確化することは、読み手がその日本語を知って、日本人が話すのを理解したり、逆に訪問者が、その言葉を使って質問したり、自分の経験を話したりする際に有用である。

《反対論》

- マクロンは特殊な記号で、一般の観光客にとって解説文を読む妨げになる。
- 地域が解説板やウェブサイトに原稿を転載する際に、「文字化け」することがあり、そうした場合、自分の PC で新たにどう打ち出したらいいかわからないといった問題が想定される。
- マクロンは、使うとしても無差別に使えるものではなく、以下のように使わないのが一般的な場合があり、ライター／エディター／地域にとって、その分別が負担になる。
  - 英語化されている日本語の単語(*Merriam-Webster* の辞書に記載があることが基準)にはマクロンをつけない。
  - よく知られている地名(Tokyo、Kobe、Osaka、Hokkaido など)にはマクロンをつけない。

（注）マクロンを使わず、たとえば「おお」や「おう」の音に対し、“oo”、“ou”、“oh” などを充てるのは時代がかった印象を与えかねないので、原則として避けるべきである。ただし、個人、地域協議会、観光拠点などから、あえて特定のつづ

り（たとえば、Mohri［毛利］、Andoh［安藤］など）を使いたいというこだわりがある場合は、特例として対処する。

(4) 複数形

原則として、ローマ字表記の日本語は、日本語の文法に倣い、単複同形とする。これは英語化された日本語の場合にも適用される。ただし文脈によっては、以下の例の最初の２つにあるように、複数形に“s”をつけたほうがよいケースも考えられるので、そういう場合には編集者の判断に委ねる。

例：

《単数》	《複数》
shogun	shoguns
futon	futons
daimyo	daimyo
shoji (panels)	shoji

■英語テキスト中の日本語の使用規準

観光客に向けた英語解説文は、もっぱら英語語彙を用いて書くのが原則であるが、ローマ字表記の日本語を取り入れるのも、テキストを豊かにする場合がある。ただし、読み手の注意力を削いだり、読む気を失わせたりすることがないよう、固有名詞や翻訳不能な用語を含め、過度に日本語が目につくような使用は避けるようにしなければならない。

用いる場合に最も抵抗感の少ないのは、local religious experts (*oshi*) who traveled around Japan preaching…のように、英語の説明の後に括弧書きで入れる方式である。ただし以下に示す例文中に見られるように、他の方式が自然な場合もある。

日本語の英語テキストへの組み入れが有意義と考えられるのは以下の場合である。

(1)その日本語を知ることで訪問者の日本理解が深まると判断される場合

例：

-The building is known for the ingenious designs of the finger-holds (*hikite*) on the *fusuma* and other interior partitions.

-The building's southeastern portico is decorated with a *shimenawa* rope marking the boundary between sacred and profane space.

(2)日本的な植物など、英語による表現ではイメージしにくく、その観光スポットで知っておくと役に立ちそうな場合

例：

-*Mizubasho* (Swamp lanterns; Lysichiton camtschatcensis) and fawn lilies (*katakuri*) bloom along the course.

-A pair of *komainu*, mythical guardian figures, flank the entrance to the shrine.

(3)英語による対応語がなく、英語だけで説明しようとすると複雑で長くなりそうな概念、事物など

例：

- *kotatsu* (a table equipped with a heating device)
- a *shimenawa*, a large straw rope marking the boundary between sacred and profane space.

日本語の観光案内においては、しばしば植物名、自然地名、詩の一節が登場するので、以下簡単に、そうした日本語の扱いについて説明しておく。

1. 植物名

植物名に関して、ライター／エディターは、以下のガイドラインに沿って、その文脈においてどの表記形式が最もふさわしいかを判断する。

(1) 情報提示の方式

•英語名によってどんな植物であるかが容易に伝わる場合は、英語名のみを用いる。植物についてどれだけ詳しい情報を要する文脈であるかをよく考慮する。それほど必要でない箇所で日本語を入れたりラテン語を入れたりするのは、余計な、ないし衒学的な印象を与えかねない。

例：

（×）The statue is made of Japanese cypress (hinoki); the *fusuma* panels are covered with designs of iris (*kakitsubata*; *Iris laevigata*); the chest is made of paulownia wood (*kiri*; *Paulownia tomentosa*).

（○）The statue is made of cypress; the *fusuma* panels are covered with designs of iris, and the chest is made of paulownia wood.

•日本語名を出すことが訪問者の理解の助けになると判断される場合は、以下のように、英語名（日本語名）、英語名（日本語名、ラテン語名）、日本語名（英語名）、日本語名（英語名、ラテン語名）のどれかを、それぞれのケースに応じて適宜選ぶ。英語名が一般の訪問者にそれほど馴染みがない場合は、日本語を先にしても構わない。学術的に正確を期したい場合は、ラテン語を付記する。（ラテン語名はイタリック体にして、最初の語の頭文字を大文字にし、２番目以降は、固有名詞以外は小文字にする。）

例：

- rabbit-ear iris (*kakitsubata*)
- paulownia (*kiri*; *Paulownia tomentosa*)
- *fukujuso* (Adonis plant)
- *dodan-tsutsuji* (white enkianthus; *Enkianthus perulatus*)

•英語名が（一般的な英語の辞書に）見当たらない場合、また特別に日本語の名称を使用したほうがよいと判断される場合は、日本語名をイタリック体で書き、その後に括弧書きでラテン語名を付記する。

例：

コハマギク：*kohamagiku* (*Chrysanthemum yezoense Maekawa*)

榊：*sakaki* tree (*Cleyera japonica*)

（注）英語名に地名が含まれている場合は、その地名の頭文字を大文字にする。

白山芍薬：Hakusan rhododendron

禅庭花：Amur daylily

(2) よく出てくる注意すべき植物名

次の植物はとくによく出てくるもので、注意が必要である。（その他主要植物に関しては、Appendix 2「植物名」を参照。）

植物名	推奨される表記法
葵 *aoi* (*futaba aoi*)	wild ginger ないし Japanese wild ginger （× hollyhock［これは立葵で別種の植物］）
銀杏 *icho* (中国語 *yinxing*)	ginkgo（gingko よりもよい）
水芭蕉 *mizubasho*	*mizubasho* (swamp lantern; *Lysichiton camtschatcensis Schott*)
女郎花 *ominaeshi*	*ominaeshi* (maidenflower; *Patrinia scabiosifolia*)ないし patrinia (*Patrinia scabiosifolia*)

すすき *susuki*	silvergrass ないし miscanthus grass (*susuki*)ないし eulalia grass (*Miscanthus sinensis*)（×pampas grass は別種の植物）

２．自然地名

日本は山、峠、丘陵、高原、平野、岬、海岸、谷、川、小川、湿原など、地形的に豊かな国である。

北半球の地形の分類には共通性があるため、通常は日本語に対応する英語が存在する。訪日外国人旅行者が理解しやすく呼びやすい英語の自然地名にすることが重要である。

原則として、自然地名の英語表記は「地名部分＋地形部分」で構成され、その地名部分に日本語を入れる。（山、湖などは、通常順序が逆になる。）

例：

荒川：Ara River

等々力渓谷：Todoroki Ravine

石見高原：Iwami Highland

奥羽山脈：Ou Mountain Range ないし Ou mountain range

白糠丘陵：Shiranuka Hills

関東平野：Kanto Plain

筑波山：Mt. Tsukuba（「山」には “Mount.” ではなく“Mt.” を用いる）

野尻湖：Lake Nojiri

•山（岳）

「～山」は、普通は「富士山」の「富士」部分を地名部分として、Mt. Fuji とするが、大山や飯山の場合は、Mt. Daisen、Mt. Iiyama とせざるを得ない。

「～岳」（～タケ、～ダケ）の場合は、場合によるが、-take, -dake を含めて地名にしているケースが多い。

例：

只狩山：Mt. Tadakariyama

父ヶ岳：Mt. Tetegatake

京ノ岳：Mt. Kyonotake

七ツ岳：Mt. Nanatsudake

権現岳：Mt. Gongendake

•島

「～シマ」も「～ジマ」も、それを地名に含めないケースと含めるケースの両方がある。

例：
福江島：Fukue Island
黒島：Kuroshima Island
姫島：Himejima Island

秋吉台 Akiyoshidai Plateau の -dai は plateau を意味するし、尾瀬ヶ原 Ozegahara Marsh の -hara には marsh (湿原)の意味がすでに含まれている。そうであれば、“Akiyoshi Plain”、“Oze Marsh” でよさそうなものだが、地域関係者にとっては耳慣れないため「正しい」とは感じられない可能性が高い。定訳がまだ固まっていないものについては、そのつど関係者と協議しながら調整するのがよい。

一つの方法は、定冠詞 (the)をつけなくて済む場合は、「地形」部分の英語を略し Ozegahara provides a habitat for …” のようにし、定冠詞をつけるべきところでは、“The Ozegahara marsh is known for the many species …” として、使い分けることである。

３．詩

詩（和歌、俳句）など日本語テキストを観光の解説文に組み入れる場合は、日本語の部分をイタリック体にしてその読みを表記し、英語訳を添えるのが一般的である。日本語、英語とも、必要な区切りで行替えを行う。別のメディアにも転用する可能性を考え、シンプルなフォーマットで作成すること。

例：「夏草や 兵どもが 夢の跡」
natsukusa ya
tsuwamono domo ga
yume no ato

The summer grasses—
For many brave warriors
The aftermath of dreams

■イタリック体

イタリック体の主な用途は、(1)英語テキストに組み入れられた外国語の明示、(2)文学・芸術作品の題名、そして(3)強調である。引用符もこれらの目

的で使われることがあるが、イタリック体の語をさらに引用符で囲むことはしない。（ただし、外国語を含む複数の語がまとまった意味を成しており、それを引用符で囲む場合、外国語部分をイタリック体にするのは差し支えない（例：「柚子の家」 “*yuzu* house”））。出版物、作品名（例：*The Tale of Genji*）以外の固有名詞はイタリック体にしない。

(1)英語にとっての外国語の言葉

Merriam-Webster の辞書に見出し語として掲載されていない日本語は、原則としてイタリック体にする。すでに多くの日本語由来の言葉が英語の一部になっている（例：sushi, matcha, shogun, haiku など。その他の日本語由来の事例は、*Japan Style Sheet* のリストを参照）。これらすでに英語化しているものについてはイタリック体にする必要はない。

英語のみで意味が伝わる場合には、日本語を使う必要はない。あえて日本語を出す場合は、その日本語をイタリック体にし、英語の対応語、語釈、または逐語訳を添える。日本をすでに経験している外国人には馴染みがあっても、日本を初めて訪問する観光客はまず知らないと思える日本語については、英語の説明を添えたほうがよい。（例：*noren*, door curtain）

日本語をイタリック体にして導入する際、３つの形式が代表的である。

(a) 英語の訳の後に、括弧書きで日本語を添える、ないしその逆。

例：

露地：tea garden (*roji*) ないし *roji* (tea garden)

引き手：finger-holds (*hikite*)

柿釉：*kaki* (persimmon-colored) iron glaze

庫裏：kitchen (*kuri*)

(b)日本語の近辺で、その意味がわかるように説明を加える。

例：

引き手：decorative *hikite* finger-hold fittings of the sliding panels

戦国時代：Sengoku period (1467–1568) of constantly shifting alliances and rivalries among local warlords.（この場合、Sengoku は時代名なので、イタリック体にしない。）

(c) 英語の説明が生硬に感じられる場合は、英語を引用符で囲む。

例：

扇の勾配：These parabolic *ishigaki* are sometimes known as *ogi no kobai*, “folding fan slopes”

(2)文学・芸術作品の題名

The Japan Style Sheet、*The Chicago Manual of Style*、および *The Monumenta Nipponica Style Sheet* に準拠する。原則として、書籍のタイトルはイタリック体で、書籍中の論文名や章名は引用符で囲む。日本語の書籍名は最初の文字だけを大文字にする。

例：

- *Kojiki*, the first written record in Japan
- *Natsu no owari* (End of Summer)
- *Oku no hosomichi* (*Narrow Road to the Deep North*) ないし *Narrow Road to the Deep North* (*Oku no hosomichi*)

（注）上の『古事記』の例では、英語部分が題名の説明になっている。『夏の終り』は英訳がなく、そういう場合は暫定的な訳を括弧の中にローマン体で書く。もし作品の翻訳が英語で出版されているなら、『奥の細道』の例のように、英語による題名も、原作の日本語作品名と同様に、イタリック体で表記する。

■言語名の短縮表記

中国語（Chinese）: Ch.
日本語（Japanese）: Jp.
韓国（朝鮮）語（Korean）: Kr.
サンスクリット語（Sanskrit）: Sk.

■句読記号

(1)シリアルコンマの使用

シリアルコンマ（serial comma: 3 つ以上のものを列挙する際、接続詞 “and” および “or” の前に置くコンマ；Oxford comma とも言う）は、本事業では、使用する方式を採用する。(A, B, C, and D; A, B, or C)

例：Tours are available in the morning, afternoon, and evening.

(2) 引用符とアポストロフィ

引用符としては、必ず勾玉型の二重引用符（“”）、一重引用符（‘’）を用い、真直ぐなタイプ（""）／（''）は用いない。アポストロフィについても、勾玉型の（’）を使い、（'）は使わない。

日本語をローマ字表記にして英文テキスト中に持ち込む場合、イタリック体にする以外に、引用符で囲む方式がある。（ただしイタリック体との併用はしない。）引用符には、イタリック体と同様、記載した言葉が外国語であることを示す機能がある。

例：

- Reference to the word “mukusa” is moreover evidence that the garden’s name was originally read “Mukusa no sono.”

(出典： *Daimyo Gardens* by Shirahata Yozaburo, 2016, p. 124.)

- It is polite to say “Itadakimasu” before beginning to eat.

(3)引用符／括弧と句読記号

(a) 引用符と句読記号

ピリオドとコンマは、引用符の中に入れる。コロンとセミコロンは、引用符の外に出す。

例：

- The name of a shrine will often include the word “jinja,” but you will also see “taisha,” “jingu,” “gu,” and “miya.”
- And now some other dishes regarded as “B-grade”: *gyoza*, *kare raisu*, and *yakisoba*.

(b) 括弧と句読記号

括弧の場合は、括弧の外に句読記号を置く。（ただし文全体が括弧の中にある場合は、ピリオドは括弧の中に入る。）

例：

（○）The soy-sauce ice cream is tasty as well (¥150 plus tax).

（×）The soy-sauce ice cream is tasty as well (¥150 plus tax.)

(4)コロン

前の語との間にはスペースを入れず、コロンの後には１バイト（半角）スペースを入れる。（日本語フォントの２バイト（全角）のコロンにならないよう注意。）

(5)ハイフンとダッシュ（エンダッシュ、エムダッシュ）

- ハイフンは、複数の単語をつないで複合語にしたり、文章を読みやすくしたりするために使用する。また、行の最後の語がその行に収まりきらないとき、語を分割する際に使われる。さらに、日本語の言葉や地名について、正確な発音を容易にするための区切り記号としても使うことができる。
- ダッシュにはエンダッシュ、エムダッシュの２種類があり、長さも用途も異なる。

(a)ハイフン

- 住所表記

行政区域（市、町、村、区など）、丁目・番地はハイフンでつなぐ。また、地名については、地域の意味的な区切りとしての接頭語／接尾語（特に接尾辞が行政的な区分を示すとき）にはハイフンを使用して区切りを明確にする。

例：5-39 Kami-Miyanomae-cho, Sakyo-ku, Kyoto（「上宮前町」の「上」は接頭語、「町」は行政区分を示す接尾語であるから、ハイフンで区切る。）

- 地名表記

住所表記と同じく、地名の前か後に、地域名、ないし東、西、南、北、上、中、下、新、旧、前、元などの接頭語／接尾語がある場合、ハイフンで分ける。その場合、ハイフンの後の文字は大文字にする。

例：

安芸高田市：Aki-Takata　　会津朝日岳：Mt. Aizu-Asahidake

西吾妻山：Mt. Nishi-Azuma　　ウコタキヌプリ：Mt. Ukotaki-Nupuri

（注）陸前高田（Rikuzentakata）市など、地域がハイフンのないつづりを指定している一部の場所ではその指定に従う。

原則として、地名の後には市区町村（City、Town、Village）などの語を加えない。これらの語は住所表示のための行政用語であり、地名の一部ではない。文中では、必要であれば “the city of…”、“the town of…” 等の表現を地名の前に置く。たとえば長野県の長野市など、都道府県名と都市名が同じ場合は文脈を考慮し表記を決める。一般的な文章においては、地名に行政単位(-shi、-ken、-machi、-cho、aza-)を含める必要はない。（住所については、上記の「住所表記」の項を参照。）

国立公園の名前などでは、２つないし３つの地域名の組み合わせをハイフンでつなぐべきものもある(例：Towada-Hachimantai National Park、Fuji-Hakone-Izu National Park)。各地域の文書内で表記を統一すること。

•発音を容易にするためのハイフン

ある用語が一続きの語としてつづられると、長すぎて明らかに発音しづらいと判断される場合、要所にハイフンを入れると読みやすくなる。

例：

数寄屋造り：*sukiya-zukuri*（ないし *sukiya* style）

兜造り（屋根様式）：*kabuto-zukuri*（ないし *kabuto* style）

五右衛門風呂：*goemon-buro*（cauldron bath）

•神仏の名称

神の名称の英語表記にハイフンを使わない近年の傾向に従い、本スタイルマニュアルでもハイフンを使わないことを推奨する。神道だけでなく、仏教や土着信仰の神々についても同様（kami は *Merriam-Webster* のオンライン版に収録されており、英語語彙としても使用可能。詳細は Appendix 2「仏・菩薩」の項を参照。）

例：

天照大神：Amaterasu Omikami

伊弉諾尊（イザナギノミコト）：Izanagi no Mikoto

十一面観音：Juichimen Kannon

•神社仏閣の名称

寺や神社の日本語名称には、「～寺」や「～院」のように temple または hall を意味する接尾語がすでについている。表記の統一のため、これらの接尾語の前にハイフンはつけず、Temple や Hall や Shrine を添える。

例：

東大寺：Todaiji Temple

長谷寺：Hasedera Temple

平等院：Byodoin Temple

釈迦堂：Shakado Hall

平安神宮：Heian Jingu Shrine

松尾大社：MatsuoTaisha Shrine

•建造物・遺跡の名称

神々の名称と同様、観光対象となっている建造物・遺跡等の固有名詞はハイフンなしで表記する。その際、助詞の「の」は、“no” のように小文字表記にする。

例：

白玉之塔：Shiratama no To

天岩戸：Ama no Iwato

(b)エンダッシュ(N dash・en dash)

エンダッシュ（大文字 N の横幅のダッシュ）は、期間(例：1603–1867)、ページ番号（例：pp. 52–54）のように、数字と数字をつなぐ際、および、等価な２つのもののつながりを示す際(例：the San Diego–Las Vegas flight; the history of Japan–U.S. relationship)に用いる。

(c)エムダッシュ(M dash・em dash)

エムダッシュ（大文字 M の横幅のダッシュ）は、文の途中に情報を補足的に挿入する際に使う。エムダッシュで囲まれた部分を含む文構造は、文の流れを中断して、文を読みにくくするし、またエムダッシュ記号が、異なるコンピュータ・システム間でしばしばハイフンに「文字化け」するので、本事業では可能な限り使用を避けること。

例：As you stroll through the cedar-lined trail—the distant “borrowed scenery” spreading before you beyond the Back Garden—a rivulet gurgles companionably at your feet.

■人名、その他の固有名詞

(1)人名

(a)原則として、日本人の名前は、日本の慣習に従い苗字を先にする

ただし苗字をすべて大文字にする表記方法は用いない。歴史上の人物、筆名、雅号、アーティスト名もこの原則に従う。

例：

徳川吉宗→Tokugawa Yoshimune

伊藤若冲→Ito Jakuchu

(b)海外で「名前→苗字」の順で広く知られている人物についてはそれに従う

例：

村上春樹→Haruki Murakami

草間彌生→Yayoi Kusama

(c)再出の日本人名

既出の人名に再び言及する場合、一般的には苗字だけを用いる。

例：The garden was created in collaboration with Ishihara Kazuyuki, a Japanese landscape designer whose work is known around the world. Ishihara has won multiple gold medals at the prestigious Chelsea Flower Show held annually in London.

(d)再出の日本人名の例外

特に以下のような場合、一般的に苗字ではなく名のほうを使う。

•歴史上の人物（例：豊臣秀吉（Toyotomi Hideyoshi）→ Hideyoshi; 千利休（Sen Rikyu）→ Rikyu; 宮本武蔵（Miyamoto Musashi）→Musashi）

•筆名や芸名（例：夏目漱石（Natsume Soseki）→Soseki; 森鷗外（Mori Ogai）→Ogai; 葛飾北斎（Katsushika Hokusai）→Hokusai）

•（屋号を持っていたり、苗字がなく名だけを持っていたりした）職人や商人など代々続く家系を代表する明治時代以前の人物（例：紀伊國屋文左衛門 Kinokuniya Bunzaemon→ Bunzaemon）

（注）歴史上の人物で、苗字・名前の組み合わせではなく、名と職位の組み合わせになっている場合があるので、注意を要する。

例：

紫式部（Murasaki Shikibu）（式部は名ではなく宮中での身分を表す。）

丹後局（Tango no Tsubone）（局は名ではなく宮中での身分を表す。）

(e)韓国人と中国人の人名

韓国または中国の歴史上の人物の名前については、日本名の後に括弧書きで本来の読み方を付記するよう努める。

例：

観勒僧正：Kanroku Sojo (Kr. Kwalluk) （Kr.は Korean の略）

鑑真：Ganjin (Ch. Jianzhen; 688–763) （Ch.は Chinese の略）
白楽天：Haku Rakuten (Ch. Bai Juyi or Letian; 772–846)

(f)施設名、社名、ブランド名

一般に、各単語の頭文字のみを大文字にする。日本での「正式な」英語名称がすべて大文字で表記されている場合でも、頭文字だけを大文字にする。

例：
Hakuhinkan Toy Park
Sango Yuntaku-Kan Visitor Center
Sony（×SONY）

(g)芸術、芸能、工芸、宗教、思想、信仰などの流派／宗派

例：

•絵画
大和絵：Yamato-e
日本画：Nihonga ないし Japanese-style painting
洋画：Yoga ないし Western-style painting
南画：Nanga ないし Southern School painting

•芸能
歌舞伎：kabuki ないし Kabuki
能：noh ないし Noh
雅楽：*gagaku* ないし Gagaku
浄瑠璃：*joruri* ないし Joruri
狂言：*kyogen* ないし Kyogen

•建築様式
禅宗様：Zenshuyo ないし Zen-style
唐様：Karayo ないし Chinese-style
和様：Wayo ないし Japanese-style

•陶磁器：ローマ字表記で頭文字を大文字にし、“yaki”を使わない。
大樋焼：Ohi ware
楽焼：Raku ware

•漆器：ローマ字表記で頭文字を大文字にし、“nuri” を使わない。
輪島塗：Wajima ware
蒔絵：lacquered wood with *makie* (sprinkled metallic powder) decoration

•工芸
肥後象嵌：Higo inlay (Higo *zogan*)

•思想・信仰
国学：Kokugaku
修験道：Shugendo

■大文字

地名、（寺院や組織などの）固有名詞、(首相、次官などの)官職名、施設名などについては、英語と同様、頭文字を大文字にする。（*The Chicago Manual of Style* および *Japan Style Sheet* を参照。）

（注）
•本堂、金堂、講堂などの寺院の建物は一般名詞だが、各寺院においてはそれぞれの建物の固有名称として使われている場合、固有名詞として扱う。
•企業団体、組織等の名称は、頭字語または略語でない限り、すべてを大文字で書くことはまれである。日本における「正式名称」がすべて大文字の場合であっても、英語の文章を書く上ではその表記に従わないほうがよい。企業は独自の大文字のスタイルを決定する権利はあるが、他の出版物に対してそのスタイルを押しつけることはできない。
•prefecture や province が固有名詞として使用される場合、頭文字を大文字にする（例：長野県 Nagano Prefecture、阿波国 Awa Province）。複数の場合は *The Chicago Manual of Style* に従い、Nagano and Gifu Prefectures とする。

■時代・年代

(1)時代

解説文の多くの読み手は日本の時代区分と年号（元号）に馴染みが薄いと考えられるため、西洋の時代区分表記で置き換えるのが望ましい。やむを得ず日本の時代名／年号名を使う場合は、必ず対応する西暦年や世紀を併記すること。たとえば「化政文化」のように、芸術・文化の時代のまとまりを示している場合は、年号を使わざるを得ない。その場合は、“Bunka-Bunsei culture (1804–1830)” のように、西暦年を併記する。

各歴史的時代が西暦のいつからいつまでに相当するかは Appendix 2 の「日本史の時代名」を参照。これらの年代は日本についての代表的な英語資料で使われているものであり、日本語の資料の慣行とはわずかながら異なっている場合がある。（*The Japan Style Sheet*, pp. 70–81 参照。）

本事業では、「時代」について、“era” と “period” を次のように区別している。

・period：大枠としての時代区分；日本史の教科書の章分けに相当
（例）縄文時代、弥生時代、鎌倉時代、近代、現代
・era：元号による区分や period の中の細分；「～期」に相当
（例）元禄時代、寛政時代、明治時代、大正時代

（注）

・同じ「時代」のように見えても、期間が異なる場合がある。たとえば政治史でいう徳川時代は Tokugawa period (1603–1867)*であるが、美術史でいう江戸時代は Edo period (1600–1868) である。（Appendix 2 の「日本史の時代名」を参照。）
（*政治史の徳川時代の終わりは、1867 年で、1868 年ではないことに注意）

・「明治」は元号なので “era” だが、半世紀近くも続いたので、日本研究や日本史全般の分野では “period” としても扱われている。このように年号については “era” が原則だが、明治、大正、昭和、平成、令和という近代以降の元号については、文脈に応じて “era” と“period” の両者が使用されているのが現状である。

•ほとんどの訪日外国人には、こうした時代区分は馴染みがないので、可能なら西暦の 100 年区切りの “century” や 10 年区切りの “decade”を使って表すのが望ましい。

例：

（×）Judging by the use of nails in the structure, the Old Shimomura Family Residence was most likely constructed in the Edo period (1603–1867).

（○）Judging by the use of nails in the structure, the Old Shimomura Family Residence was most likely constructed in the 1850s or 1860s.

（×）The business is no longer in operation but thrived throughout the Meiji era (1868–1912) and in the early years of the Showa era (1926–1989).
（○）The business thrived for more than seven decades from the mid-nineteenth cenrury to the 1930s.

(2)年代

•「時代」については開始年と終了年、「歴史的人物」については生没年を、数字の省略なしで記載する。（２つの数字の間にはエンダッシュを入れる。）文化財の場合は、指定年を括弧の中に記載する。

例：
- Taisho era (1912–1926)
- the warrior Minamoto no Aritsuna (1155–1186)
- Kiyosu Yukiyasu (1901–1975)
- National Treasure (1970)

•西暦の年代を使う。年号（元号）は文脈上必要な場合のみ用いる。
•「紀元前」／「紀元」の表記が必要な場合は、BC や AD ではなく、宗教に中立的な BCE (“before the Common Era”) ／CE (“of the Common Era”)を使用する。

例：Jomon period (14,500–900 BCE)

•人物の生年が不明な場合は、没年だけを(d. xxxx)のように表記するか、大まかな時代を述べる（例： “nineteenth-century figure...”）に留める。没年が不明の場合、また存命中の場合、必要であれば生年だけ(b. xxxx)の形で記す。文脈上どの時代かが推定できる場合、および生没年が不明な人物については、その時代が文脈上明らかな場合はそれで十分である（例：The pottery style was resurrected in 1980, nearly 150 years later, by local potter Ito Hyodo.）。
•年代に複数の説がある場合（たとえば豊臣秀吉については、1536–1598 と 1537–1598 の２つの説がある）は、権威があると判断される方、ないし対象となる観光拠点、または地域協議会が指定する年代を使う。

また確証のない年代については、一般的な慣行に従い、年代の後に“?”をつけて、正確な年代が不明であることを示す表記が推奨される。

例：Matsudaira Chikauji (d. 1394?)

■数・記号

(1) 基数

• 1 から 9 までの数字、および文の先頭にある数はアルファベットで表記する（*The Chicago Manual of Style* に準拠）。

例：

- Three temples, with a total of nine buildings, once stood on this mountain.
- One hundred ten candidates were accepted for the nine seats available.

(110 は本来ならアラビア数字になるところだが、文頭なのでアルファベット表記)

ただし括弧の中に示されたデータとしての数値には、1 から 9 までの数字であっても、アラビア数字を用いる。

例：(1hour 40 minutes)

しかしその場合でも、括弧の中にデータ以外の言葉が含まれる場合、1 から 9 までの数字にアルファベット表記を適用する。

例：(about five minutes by car from Akanuma)

•世紀はすべて、sixth century, fifteenth century のようにアルファベットで表記する。（×6th century; 15th century）

•また、下の「温度」「金額」「距離・寸法の単位」の項で指摘してあるように、「摂氏 5 度」「7 キロメートル」「9 ドル」といった場合、1 から 9 までの数字であっても、アラビア数字を使う。

•上記は原則であって、文脈・媒体に応じて適宜対応しなければならない。1 文中、ないし 1 パラグラフ中に、数が何回も出てくる場合や、その文が芸術作品や建築物の寸法に重点を置いて述べている場合は、アラビア数字を使うのが望ましい。重点は「読みやすさ」にあり、アラビア数字のほうが適切かつ読みやすいと判断される場合は、その判断に従ってよい。

例：

The stone base (*tenshudai*) for the unbuilt tower consists of two rectangles. The larger one—measuring 46 meters north to south, 42 meters east to west, and 9 meters tall—was for the tower itself, while the smaller one was for the entrance slope.（“two rectangles” 以外は建築物の寸法なのでアラビア数字表記）

(2) 序数

•序数（順序を表す数）についても、基数と同様の原則を適用する。

例：the sixth abbot of Daitokuji; the 127th abbot of Daitokuji; the third-largest temple in Kyoto; 300th anniversary of Arita ware

•アラビア数字を使った序数の表記には上付き文字を使用しない。(×127th)

(3) 割合（パーセント）

•数値部分は、文章の冒頭部以外ではアラビア数字を用いる。

•「パーセント」は、科学分野や統計分野の文脈では記号の“%”が広く用いられ、一般的な文脈では“percent”が好まれる。本プロジェクトでは原則として“percent”を用いる。

(4) 温度

•数値部分は、1～9 であってもアラビア数字で表記する。

•「～度」の部分は、摂氏を用い、“degrees Celsius”と表記する。（ [°] や [°C] は文字化けしやすい。）

•ただしスペースの関係で、スペルアウトするとあまりにも間延びして見える場合は、記号の“℃”を用いる。

例：

…when temperatures range from 15℃ to 25℃ at lower altitudes and from 5℃ to 15℃ at higher altitudes. Earlier in spring and later in autumn, temperatures can be more than 20 degrees lower than these.

■金額

•通貨記号（¥, $, £）を使う。（×yen, dollar, pound）

•価格や料金の表記には、1 から 9 までの数でもアラビア数字を使用する。

例：

-The entire estate was worth ¥8 million.
-The standard fee for geisha service is ¥25,000 per hour.
-attendance fee ¥700

■距離・寸法

•距離・寸法の単位は、日本で標準的に使われるメートル法を用いる。

•数値は 1 から 9 までの数を含め、すべてアラビア数字で表記する。

•タイトルおよび本文では、meter, centimeter, millimeter, kilogram, kilometer, hectare のようにスペルアウトする。単位の短縮形（m；cm；mm 等）は使わない。ただしキャプション、および情報補足的な文では、短縮形を用いる。また媒体のスペースによっては短縮形を使用することも考慮する。短縮形のリストは以下を参照：
https://en.wikipedia.org/wiki/International_System_of_Units

•短縮形（cm、kg など）で表記する場合、数値と単位記号の間に半角スペースを置く。省略記号を使用する場合、末尾にピリオドはつけない。
例：Its summit lies at an elevation of 1,159 meters, making it the second-highest peak in the area after Mt. Kami-Hiruzen (1,202 m).

■時刻・時間

•時間の長さの表記では “hours”や“minutes”を使い、“hrs.”や “min./mins.”のような短縮形は使わない。（ただし、バスや電車で何分というようなアクセス情報では使用可。）

•午前／午後の表記には、“a.m.”／“p.m.”（ピリオドを打つこと）を使う。

•13:00 とか 21:00 のような表記法は使用せず、1:00 p.m.や 9:00 p.m.のように表す（13:00 や 21:00 のような表記は軍用表記）。

■その他の注意事項

(1) 語の反復使用の回避

英語の文章においては、文章が単調にならないよう、同じ言葉の繰り返しの使用は可能な限り避けなければならない。

例：The beautiful Lake Shikotsu, the eighth largest ~~lake~~ fresh-water body in Japan, is located in a ~~lake~~ caldera formed after a massive eruption some 40,000 years ago.

(2)「有名／名高い」に対する注意点

“〇〇 is best known for …” や “〇〇 is known as …” といったフレーズが日本人向けのものでないか注意する。外国人観光客にはほとんど意味を持たないと判断される場合は、事実を直截に述べるほうがよい。

例：

（×）This shrine is famous for granting success on entrance examination.

（○）Many people pray at this shrine for success on entrance examination.

(3) “Japan/Japanese”という語の使い過ぎの回避

文脈から判断して、「日本」について言及していることが明らかな場合、“Japan/Japanese”という語をなるべく省くよう工夫する。「伝統工芸」と言えば、「日本の」伝統工芸を指しているのは自明であり、そこにさらに“Japan/Japanese” という言葉を重ねて言う必要はない。“Japan/Japanese”という語を使い過ぎると文章の質を落とすことになる。

(4) 短縮形の不使用

ウェブサイト用のテキストを含むすべての文章において、“it’s” や“don’t” のような短縮形を使わない。（“it is” や “do not” のように書く。）

(5) 二人称代名詞（“You”）の慎重な取り扱い

二人称代名詞は慎重に用いなければならない。“You”は読み手の関心を引き、読み手を特定の観光対象物に引き込むのに有効な場合があるが、過剰な使用はかえって読み手の気に障ることがある。

また“You”の使用を含め、読者に直接語りかける文調は、さまざまな立場にいる読み手（視覚障害者を含む）がいることを考慮する必要がある。

過剰に親しげでくだけた文調はフォーマルな解説文にはそぐわない。

ただし安全や文化的習慣に関わる指示（例：“Remove your shoes.” や“Please be respectful of these sites.”）は例外。

(6)（文化財等の）「指定」に対する英語表現

•文化財や天然記念物などの「指定」について書く時は、“designated as”のようにせず、“designated a National Treasure” のように表現する。「指定」については、タイトル、ないし文頭で触れることはしない。（訪日外国人にとって、こうした指定は、それほど興味の対象にならない。）

•頭文字を大文字にする。例：National Treasure; Important Cultural Property; Important Art Object; UNESCO World Heritage Site; Japan Heritage Site など。

•指定年が分かり、それが読み手の理解に役立つと判断される場合は指定年を付記してもよい。

(7) 包括的な表現に対する注意

ジェンダー、民族性、信仰等、センシティブな事柄に触れるときには、マイノリティーの人々に十分配慮する必要がある。包括的な表現を使うと、それに当てはまらない人々の感情を害する危険性がある。

(8) 温泉の効能についての注意

温泉の効能について書く際は、科学的に検証済みの情報であるか、それとも伝承的な知識にすぎないかを区別するように注意する。（後者の場合であれば、日本語で「～に効能あり」とされていても、たとえば "is believed to cure ailments"などの抑制された表現にする。）

(9) 誇張と比較

biggest、oldest など、誇張の危険性がある表現には注意し、穏当な表現、ないし（測定値など）実質的な情報に置き換える。

例：

（×）*Gusuku* such as Shuri Castle are great surviving monuments.

（○）*Gusuku* such as Shuri Castle are monuments to centuries of Ryukyu history.

（×）The Japanese garden has no equal in Hokkaido.

（○）The Japanese garden is designed especially for Hokkaido.

（×）Susa Jinja boasts "Seven Wonders," including a well called Shionoi...

（○）Susa Jinja is known for its legendary "Seven Wonders," including a well called Shionoi…

■注意すべき頻出用語

- 「～跡」：site, ruins, remains などが考えられるが、日本の「～跡」は、site が適切である場合が多い。寺院跡や城跡といっても、礎石があるだけだったり、なにもないスペースだったりすれば、ruins や remains を使うのは不適切である。
- 「幕府」：shogunate; central military government
- 「屏風」：folding screen／「衝立」は screen
- 「茶屋」：teahouse; cafe

- 「～氏」：clan は、日本古代・中世・近世の日本の氏族とは異なる歴史的概念で、原則使用を避ける。代わりに family や lineage を用いる。（*Encyclopedia of Japan*, vol. 8 および『国史大辞典』参照。）
- 「～家」：family; household（例：the Tokugawa family; the Matsudaira family）ただし同じ語が繰り返し使用される場合、一部 house を使ってもよい。
- 「慈悲」：仏や菩薩の慈悲という場合、mercy ではキリスト教的ニュアンスが濃厚になるので避け、代わりに compassion を用いたほうがよい。
- 「大文字送り火」：Daimonji Farewell Fires ないし“large” character fires（× bonfires は誤り）
- 「大名」：daimyo ないし daimyo lord（daimyo は英語の語彙になっているのでイタリック体にしない。）; regional lord（“feudal lord”は避ける）
- 「蹴鞠」：*kemari*, ancient game of football
- 「国道」：National Route（× National Highway）
- 「藩」：local domain（×feudal domain）「薩摩藩」というときは、“Satsuma domain” とし、Domain と大文字にしない。
- 「五輪塔」：a five-tiered Buddhist memorial（pagoda や tower は誤ったイメージを与えるので避ける。）
- 「水芭蕉」：*mizubasho* (swamp lantern; *Lysichiton camtschatcensis*)
- 「おみやげ」：長く記念として残るものであれば souvenir でよいが、食べ物については souvenir は使わない。
- 「統治する」：天皇は reign、幕府は rule ないし control、大名は govern ないし rule と使い分ける。
- 「旅館」：*ryokan* inn、または traditional-style inn（日本の宿泊施設であることは明らかなので、Japanese inn とはしない。）
- 「将軍」： shogun（×Shogun）
- 「障子」：shoji sliding panel（障子には、固定されているものもあり、そのような障子には、shoji panel だけのほうが適切；shoji は英語の辞書にあるので、イタリック体にしない。）
- 「宿場町」はハイフンを使わず post town と表記する。（×post-town、post-station）
- 「側室」：consort（×concubine）
- 「茶会」：tea gathering ないし tea (*chanoyu*) gathering（×tea ceremony）
- 「茶室」：tea house（×teahouse）
- 「床の間」：tokonoma alcove（tokonoma は英語の語彙になっている。）
- 「八百万の神」：“800 myriads of deities”; myriad deities, etc.

■Appendix 2

（注）

- 以下の表や情報は、オンラインで利用可能な資料によってまとめたものであり、完全ではないので、あくまで参考資料として利用すること。
- 本事業においては、原則としてこのマニュアルのスタイルガイドラインに示した表記ルールを使用することとするが、地域で統一されたガイドライン等がある場合は、状況に応じて判断すること。
- 本資料の表にある用語の使用例は、あくまで「例」であり、実際の作成においては、それぞれの文章の読みやすさと文脈に適した語彙選択が求められる。

■ローマ字表記法

日本語をヘボン式ローマ字で表記する際の詳しい方式は、*Japan Style Sheet* のローマ字表（japanstylesheet.com より入手可能）、ないし米国議会図書館のローマ字のページ（https://www.loc.gov/catdir/cpso/romanization/japanese.pdf）などを参照。

■神社仏閣

寺院名、神社名

本事業では、寺院や神社の名前を表記する際、～寺・～神社などの接尾語を含む読み方をローマ字表記したものに、その接尾語自体の英語訳を添える方式を採用する。この表記方法を用いることにより、訪日外国人旅行者が訪問先の神社仏閣の呼び名と意味を理解しやすくなる。

日本語には寺院や神社を分類する呼称が複数ある。

Temple: ～寺、～院

Shrine：～神社、～神宮、～大社

日本語	ローマ字表記	英語訳例	備考
神社 じんじゃ	*jinja*	Shinto shrine	shrine だけでも通じるが、「神聖な場所」という意味であるため、初出時は "-jinja (Shinto shrine)" と補足を入れるとよい
神宮 じんぐう	*jingu*	(high-ranking) Shinto shrine	神宮は天皇・皇族を祀った格式の高い神社であり、固有名詞は XX Jingu Shrine のように記載し、その意味を必要であれば補足する。
天満宮 てんまんぐう	*tenmangu*	Tenman shrine or Tenmangu shrine	天満天神（菅原道真）を祀る神社
大社 たいしゃ	*taisha*	(grand) shrine	いくつかの大きな、また社格の高い神社は「大社」と呼ばれる。
稲荷大社 いなりたいしゃ	*inari taisha* *inari jinja*	*inari taisha* shrine *inari* shrine	五穀豊穣の神「稲荷神」を祀る神社
寺 じ/てら	*ji (tera)*	temple	初出時は "temple" を付け加えるとわかりやすくなる。たとえば、Kinkakuji Temple とあれば、金閣寺が仏閣であることが明示される。 ～寺（てら）の場合は、寺を Temple に置き換える方が自然に思えることもある（例：清水寺→Kiyomizu Temple）
院 いん	*in*	temple	

（注）

•神社の場合、固有名詞として "jingu" や "jinja" "taisha" 等を表記する際は、先頭文字を大文字にする。ただし、神社名を含む日本語をそのままローマ字表記する際は、小文字のままでよい。

例：春日大社　Kasuga Taisha Shrine　　*Cf.* 引用の場合："Kasuga taisha no kenchiku"

•寺院の場合、"ji" や "in" "gu"は、ハイフンをつけずに一語として表記。

例：平等院 Byodoin Temple

神社の施設・設備

日本語	ローマ字表記	英語訳例	備考

社殿 しゃでん	*shaden*	shrine building	
本殿 ほんでん	*honden*	main sanctuary	
着到殿 ちゃくとうでん	*chakutoden*	arrival hall	
幣殿 へいでん	*heiden*	offering hall	
拝殿 はいでん	*haiden*	worship hall	
本社 ほんしゃ	*honsha*	main shrine	
末社 まっしゃ	*massha*	subsidiary shrine	
奥宮 おくのみや	*okunomiya*	inner shrine	
中宮祠 ちゅうぐうし	*chugushi*	*chugushi* middle shrine	
鳥居 とりい	*torii*	gate	
石段 いしだん	*ishidan*	stone step	
参道 さんどう	*sando*	approach	
手水舎 ちょうずしゃ（ちょうずや、てみずや）	*chozusha (chozuya, temizuya)*	hand-washing fountain	手水鉢：water basin
灯籠 とうろう	*toro*	lantern	石灯籠：stone lantern 釣灯籠：hanging lantern 万灯籠：lantern festival
狛犬 こまいぬ	*komainu*	Guardian figures, pairs of guardian *shishi* or legendary lions or other animals	*komainu* は、一般的に神社の入口を守護する一対の石像を指す。像は通常口を開いた状態と閉じた状態の（昔は角があった）獅子（*shishi*）である。二体は神社の前に鎮座する。他の守護動物には、神の使者であるキツネ、サルなどがある（稲荷神社の場合はキツネ）
絵馬 えま	*ema*	votive tablet	
柄杓 ひしゃく	*hishaku*	ladle	
香炉 こうろ	*koro*	incense burner	
二礼二拍手一礼 にれいにはくしゅいちれい	*nirei nihakushu ichirei*	lit., “two bows, two claps, and final bow”	神社での一般的な参拝の作法

賽銭箱 さいせんばこ	*saisenbako*	offertory box	
御朱印 ごしゅいん	*goshuin*	seal	より具体的に“shrine seal”または“temple seal”と、寺社を区別して書かれることがある 御朱印帳：book for collection of (shrine/temple) seals
御神輿 おみこし	*omikoshi*	portable shrine	

日本の神様一覧(アルファベット順)

日本語	ローマ字表記	英語訳例	備考
味耜高彦根命 あじすきたかひこねのみこと	Ajisukitakahikone no Mikoto	-	
天児屋根命 あめのこやねのみこと	Ame no Koyane no Mikoto	the god of wisdom	god を *kami* と置き換えるのも可
天照大御神 あまてらすおおみかみ	Amaterasu Omikami	the goddess of the sun	god を *kami* と置き換えるのも可
天押雲根命 あめのおしくもねのみこと	Ame no Oshikumone no Mikoto	the god of water and purification	god を *kami* と置き換えるのも可
経津主命 ふつぬしのみこと	Futsunushi no Mikoto	the god of swords	god を *kami* と置き換えるのも可
比売神 ひめがみ	Himegami	goddess; wife, daughter, or other goddess related to the main deity enshrined at a shrine	god を *kami* と置き換えるのも可
大己貴命 おおなむちのみこと	Onamuchi no Mikoto	-	
瀬織津姫 せおりつひめ	Seoritsuhime	goddess of exorcism	god を *kami* と置き換えるのも可
須佐之男命 すさのおのみこと	Susanoo no Mikoto	god of storms	god を *kami* と置き換えるのも可
武甕槌命 たけみかづちのみこと	Takemikazuchi no Mikoto	the god of thunder	god を *kami* と置き換えるのも可

豊受大御神 とようけのおおみかみ	Toyouke no Omikami	-	
田心姫命 たごりひめのみこと	Tagorihime no Mikoto	-	

寺の施設・設備

日本語	ローマ字表記	英語訳例	備考
山門 さんもん	*sanmon*	main gate	
仁王門 におうもん	*niomon*	gate of the guardian kings	
楼門 ろうもん	*romon*	two-story gate	
本堂 ほんどう	*hondo*	main hall	
講堂 こうどう	*kodo*	lecture hall	
観音堂 かんのんどう	*kannondo*	Kannondo hall	
阿弥陀堂 あみだどう	*amidado*	Amidado hall	
金堂 こんどう	*kondo*	main hall	
鐘楼 しょうろう	*shoro*	bell tower	
宿坊 しゅくぼう	*shukubo*	lodgings for pilgrims at a temple	
護摩・護摩祈祷 ごま・ごまきとう	*goma/goma kito*	Goma fire ritual	
末寺 まつじ	*matsuji*	subtemple	
総本山 そうほんざん	*sohonzan*	head temple	

仏・菩薩

仏教に関する説明にはしばしばサンスクリット語が含まれる。本事業では、文章のわかりやすさを優先し、bodhisattva など英語で広く使用されている語以外のサンスクリット語の専門用語は使用を控える。ただし、特にアジア圏

からの訪日客などに向けて、理解の促進に有効であると判断される場合には、使用してもよいこととする。

釈迦（the historical Buddha）の表記は Shakyamuni または Shakyamuni Buddha とし、Shaka とはしない。仏果は Buddhahood ではなく buddhahood と頭文字を小文字にする。

日本語	ローマ字表記	英語訳例	備考
＜如来（にょらい）＞Nyorai Buddha（buddha は英語辞書に収録されている；*nyorai* は避ける）			
阿弥陀如来 あみだにょらい	Amida Nyorai	the buddha Amida Amida (Amitabha) Buddha the buddha Amida (Amitabha) Amida Buddha	a celestial Buddha; Amida in Japan is a combination of the Buddha of Infinite Light (Amitabha) and the Buddha of Infinite Life (Amitayus), so caution should be exercised if adding the Sanskrit terms.
大日如来 だいにちにょらい	Dainichi Nyorai	the buddha Dainichi the buddha Dainichi (Mahavairochana) Dainichi, the Cosmic Buddha Dainichi (Mahavairochana) Buddha	the supreme deity of Esoteric Buddhism
薬師如来 やくしにょらい	Yakushi Nyorai	the buddha Yakushi (Bhaisajyaguru) Yakushi, the Medicine Buddha Yakushi, the Buddha of Healing	also Buddha of medicine and healing
＜菩薩（ぼさつ）＞bodhisattva（bodhisattva は英語辞書に収録されている；*bosatsu* は避ける）			
地蔵菩薩 じぞうぼさつ	Jizo Bosatsu	the bodhisattva Jizo Jizo (Ksitigarbha) the bodhisattva Jizo (Ksitigarbha)	Guardian figure, the savior of all sentient beings; intercessor in the Buddhist hells
観音菩薩 かんのんぼさつ	Kannon Bosatsu	Kannon (Avalokiteshvara) the bodhisattva Kannon (Avalokiteshvara)	Buddhist deity Kannon, bodhisattva of compassion Avoid using “she” or “goddess”
千手観音 せんじゅかんのん	Senju Kannon	Thousand-Armed Kannon (Avalokiteshvara)	bodhisattva of compassion Avoid using “she” or “goddess”
十一面観音 じゅういちめんかんのん	Juichimen Kannon	Eleven-Headed Kannon (Ekadashamukha)	bodhisattva of compassion

			Avoid using “she” or “goddess”
弥勒菩薩 みろくぼさつ	Miroku Bosatsu	the bodhisattva Miroku (Maitreya) the Buddha of the Future (Maitreya)	bodhisattva who will arrive on earth sometime in the future to achieve complete enlightenment and save humanity
日光菩薩 にっこうぼさつ	Nikko Bosatsu	the bodhisattva Nikko	Attendant of Yakushi, the Medicine Buddha
月光菩薩 がっこうぼさつ	Gakko Bosatsu	the bodhisattva Gakko	Attendant of Yakushi, the Medicine Buddha
仁王 におう	Nio	Nio guardian figure	Temple guardian figure
権現 ごんげん	Gongen	Buddhist deity in the form of a Shinto deity	
地蔵 じぞう	*jizo*	*jizo* statue the bodhisattva Jizo	guardian or roadside statue as principal image
明王（みょうおう）Buddhist guardian king; Wisdom King			
不動明王 ふどうみょうおう	Fudo Myo-o	Immovable Wisdom King	fierce-looking deity believed to protect the faithful and to guide followers with the fierce love of a parent
愛染明王 あいぜんみょうおう	Aizen Myo-o		a wisdom king believed to control love, marriage, and household harmony

その他信仰に関する用語

日本語	ローマ字表記	英語訳例	備考
山岳信仰 さんがくしんこう	*sangaku shinko*	mountain asceticism	
修験道 しゅげんどう	*Shugendo*	mountain religion; mountain asceticism; religion combining aspects of Shinto, Buddhism, Taoism, and mountain asceticism	
霊山 れいざん	*reizan*	sacred mountain sacred peak	
神仏習合 しんぶつしゅうごう	*shinbutsu shugo*	fusion of Buddhism and Shinto	

六道 ろくどう	*rokudo*	six states of existence	

陰陽 いんよう	*in'yo*	yin and yang	
御嶽 うたき	*utaki*	sacred site (in Okinawa)	
末法 まっぽう	*mappo*	the end of the Law latter days of the Law	

■日本史の時代名

時代/Political Periods		文化/Cultural Period	
原始/Prehistoric (Genshi)			
		旧石器時代	Kyūsekki (Japanese Paleolithic), ca. 33,000–14,500 BCE
		縄文時代	Jomon (14,500–900 BCE)
		弥生時代	Yayoi (900 BCE–300 CE）
古代/Ancient (Kodai)			
大和時代	Yamato (ca. 250–late 700s)	古墳時代	Kofun (Tumulus) ca. 250–late 700s)
		飛鳥時代	Asuka (552–645)
		白鳳文化	Hakuho (645–710)
奈良時代	Nara (710–794)	天平文化	Tenpyo (710–794)
平安時代	Heian (794–1185)	弘仁・貞観文化	Konin-Jogan (794–894)
		藤原時代	Fujiwara (897–1185)
中世/Medieval (Chusei)			
鎌倉時代	Kamakura (1185–1333)		
建武の新政	Kenmu Restoration (1333–1336)	北山文化	Kitayama (1367–1408)
室町時代	Muromachi (Ashikaga; 1336–1573)	東山文化	Higashiyama (1449–1473)
南北朝時代	Nanbokucho or Northern and Southern Courts (1336–1392)		
戦国時代	Sengoku (Warring States; 1467–1568) [他の年代が使われることもある]		
近世/Early Modern Period (Kinsei)（前近代とはしない）			
安土桃山時代	Azuchi-Momoyama (1568–1603)	桃山文化	Momoyama (1568–1600)

江戸時代	Edo (1603–1867)	元禄文化	Genroku (1688–1704)
		文化文政	Bunka-Bunsei (1804–1830)
近代/Modern Period (Kindai)			
明治時代	Meiji era/period (1868–1912)		
大正時代	Taisho era/period (1912–1926)		
昭和時代	(prewar) Showa era/period (1926–1945)		
現代/Contemporary Period (Gendai)			
昭和時代	(postwar) Showa era/period (1945–1989)		
平成時代	Heisei era/period (1989–2019)		
令和時代	Reiwa era/period (2019–)		

Japan Style Sheet. Society of Writers, Editors, and Translators, Tokyo (2020)をもとに作成

■植物名

日本語名称	英語表記
アカエゾマツ	*aka ezo matsu*: Sakhalin spruce
アカガシ	*akagashi*: Japanese evergreen oak
アカマツ	*akamatsu*: Japanese red pine; Korean red pine
アマモ	*amamo*: eelgrass
アオキ	*aoki*: spotted laurel (*Aucuba japonica*)
馬酔木	*asebi*: Japanese andromeda (*Pieris japonica*)
ブナ	*buna*: beech
チャーギ	*Chagi*: Buddhist pine (*Podocarpus macrophyllus*)
ダケカンバ	*dakekanba*: Erman's birch
藤	*fuji*: wisteria
月桂樹	*gekkeiju*: bay laurel
ハマボウ	*hamabo*: *Hibiscus hamabo*
ヒゴタイ	*higotai*: globe thistle (*Echinops setifer*)
ヒジキ	*hijiki*: seaweed
ヒノキ	*hinoki* cypress: Japanese cypress
ヒサカキ	*hisakaki*: East Asian eurya
ホオノキ	*honoki*: bigleaf magnolia (*Magnolia obovata*)
イチイガシ	*ichiigashi*: red-bark oak
イタドリ	*itadori*: Japanese knotweed
ジングウツツジ	*jingu-tsutsuji*: *Rhododendron sanctum Nakai*
カエデ	*kaede*: maple
カキツバタ	*kakitsubata*: rabbit-ear iris; Japanese water iris
カシワ	*kashiwa*: Japanese emperor oak; *daimyo* oak
茅（かや）	*kaya*: grasses or reeds
ケヤキ	*keyaki*: zelkova
桐（きり）	*kiri*: paulownia
キスミレ	*kisumire*: Golden violet (*Viola orientalis*)
キタゴヨウ	*kitagoyo*: Japanese white pine
コバノミツバツツジ	*kobanomitsuba tsutsuji*: Netted azalea (*Rhododendron reticulatum*)

コナラ	*konara*: jolcham oak
高山植物	*kozan shokubutsu*: alpine plants
クヌギ	*kunugi*: sawtooth oak
クララ	*kurara*: shrubby sophora
クロマツ	*kuromatsu*: black pine
マリモ	*marimo*: moss ball; lake ball
メアカンフスマ	*Meakan-fusuma*: *Arenaria merckioides*
メアカンキンバイ	*Meakan-kinbai*: *Sibbaldia miyabei*
ミヤマキリシマ	*miyama kirishima*: Kyushu azalea (*Rhododendron Kiusianum*)
ミズナラ	*mizunara*: *mizunara* oak
モミ	*momi*: fir; Japanese fir
ラワンブキ	*Rawanbuki*: Giant butterbur
ササユリ	*sasayuri*: bamboo lily
シャリンバイ	*sharinbai*: Yeddo hawthorn
シラカシ	*shirakashi*: bamboo-leaf oak
スダジイ	*sudajii*: chinkapin (*Castanopsis sieboldii)*
杉	*sugi*: Japanese cedar; cryptomeria
ススキ	*susuki*: silvergrass; eulalia grass; Chinese silvergrass; miscanthus grass
テングサ	*tengusa*: *Gelidiaceae* red algae
テンナンショウ	*tennansho*: jack-in-the-pulpit
ツガ	*tsuga*: southern Japanese hemlock
ツゲ	*tsuge*: boxwood (*Buxus microphylla*)
ツワブキ	*tsuwabuki*: leopard plant
ウバメガシ	*ubamegashi*: *ubame* oak (*Quercus phillyraeoides*)
ヤブツバキ	*yabutsubaki*: Japanese camellia
ヤシャブシ	*yashabushi*: Japanese green alder
ヤツシロソウ	*yatsushiroso*: clustered bellflower

■動物名

日本語名称	英語表記
アオゲラ	Japanese green woodpecker
アカウミガメ	loggerhead turtle
アサギマダラ	chestnut tiger butterfly
イワツバメ	house martin
ウグイス	fan-tailed warbler
ウミネコ	black-tailed gull
エゾシカ	Yezo sika deer
エゾモモンガ	Siberian flying squirrel
オオジシギ	Latham’s snipe
オオハクチョウ	whooper swan
オジロワシ	white-tailed eagle
カッコウ	cuckoo
カワウ	great cormorant
ガムシ	*Hydrophilidae*
クマゲラ	black woodpecker
クロツラヘラサギ	black-faced spoonbill
ケラマジカ	Kerama deer
コゲラ	Japanese pygmy woodpecker (*kogera*)
コミミズク	short-eared owl
サシバ	grey-faced buzzard
シロチドリ	Kentish plover
スナメリ	finless porpoise
ニホンカモシカ	Japanese serow
ノスリ	common buzzard
ハイタカ	Japanese sparrow hawk
ハッチョウトンボ	hacchou-tombo
ハネカクシ	rove beetle
ヒヌマイトトンボ	four-spot midget
ホオジロ	bunting
ミサゴ	osprey

■食・食文化

日本語名称	英語表記	訳例	備考
温泉饅頭	*onsen manju*	bean-jam buns sold at a hot spring resort	
笹寿司	*sasazushi*	sushi wrapped in *sasa* bamboo leaves	
流しそうめん	*nagashi-somen*	“streaming” somen noodles	
麹	*koji*	koji mold used for fermentation	
日本酒	*nihonshu*	*Sake* (×rice wine)	
天然酵母	*tennen kobo*	natural yeast	
和三盆	*wasanbon*	fine-grained Japanese sugar	
和菓子	*wagashi*	traditional Japanese sweets	

■英文表記：忘れてはならない「6 つのルール」

英文を案内板やウェブページで表示する際に、編集やデザイン、その業務の担当者が忘れてはならない「英文表記のルール」があります。それを踏まえていない英文では、読み手は見た目の不自然さや拙さに気が向いてしまい、肝心の伝えるべき内容がスムーズに頭に入ってこないことも起こってしまいます。そうならないために、ここで特に重要な 6 つの基本的ルールを紹介します。
これらのルールは、*Chicago Manual of Style*、*Japan Style Sheet*、*JTA Writing and Style Manual* 等に共通している標準的なフォーマットです。

１）英文には和文フォントを用いない
英文テキストは、すべて 1 バイトの単位で作成されています。一方、和文フォントは 2 バイト単位で作成され、欧文フォントとは基本構造が異なります。
そのため、1 バイトの英文を和文フォントで表示すると、見栄えが悪くなるばかりか、「文字化け」したり、文として意味をなさなくなったりさえすることがあります。
特に注意したいのは、欧文フォントで書かれた英文テキストを和文フォントのテキスト内にコピー&ペーストするケースです。その際、引用符（“ ”)、アポストロフィ（’)、ダッシュ（—）等が全角記号に誤変換されることがしばしば起こります。読み手は、誤った記号の使われ方をした文を目にして、内容を読み取ろうとする以前に、大きな違和感を抱きかねません。

欧文フォントの正しい句読記号

(例: Times New Roman)

> “For if it is rash to walk into a lion’s den unarmed, rash to navigate the Atlantic in a rowing boat, rash to stand on one foot on top of St. Paul’s, it is still more rash to go home alone with a poet.” (Virginia Woolf, *Orlando*)

和文フォントの誤った句読記号

(例: Yu Mincho)

> ″For if it is rash to walk into a lion ′s den unarmed, rash to navigate the Atlantic in a rowing boat, rash to stand on one foot on top of St. Paul ′s, it is still more rash to go home alone with a poet.″ (Virginia Woolf, *Orlando*)

２）適切なフォントを選択する

欧文フォントには、セリフ（ひげ付き）フォントとサンセリフ（ひげなし）フォントの 2 種類が存在します。案内板の場合は読みやすいセリフ・フォントがよいでしょう。

下表にあげたのはよく使われる欧文フォントです。左列のセリフ・フォントの使用を推奨します。

セリフ（**Serif**）	サンセリフ（**Sans-serif**）	使用しない（非推奨）
Times New Roman	Arial	Osaka
Century	Verdana	ヒラギノ明朝
Garamond	Helvetica	遊明朝
Bodoni	Futura	小塚明朝
Book Antiqua	Optima	MS 明朝
Baskerville	Tahoma	

３）文字揃えを「両端揃え」にしない

英文テキストでは、行は「左揃え」にして、単語間には 1 バイト（半角）スペースを入れるのが一般的です。書式設定で行を「両端揃え」の設定にすると、日常的に英文を使う人にとって単語と単語の間がひらきすぎて読みにくくなり、ページの見た目も悪くなるので避けましょう。

例：

左揃えフォーマット（〇）

> “The habitual use of the active voice makes for forcible writing. This is true not only in narrative principally concerned with action, but in writing of any kind. Many a tame sentence of description or exposition can be made lively and emphatic by substituting a verb in the active voice for some such perfunctory expression as there is, or could be heard.” (William Strunk, *The Elements of Style*)

両端揃えフォーマット（✕）

> “The habitual use of the active voice makes for forcible writing. This is true not only in narrative principally concerned with action, but in writing of any kind. Many a tame sentence of description or exposition can be made lively and emphatic by substituting a

verb in the active voice for some such perfunctory expression as there is, or could be heard.” (William Strunk, *The Elements of Style*)

4）コピー&ペーストによるフォーマットの消失に注意

テキストのコピー&ペーストをする際に、イタリック体、太字、下線等、修飾したフォーマットが失われることがよく起こります。注意深くチェックしましょう。イタリック体は、時に「英語の言葉ではない」というサインとして用いられることがあります。日本語の音をそのまま表し（ローマ字読み）、それが日本語であることを意味する使い方です。しかし、コピー&ペーストによって、イタリック体が普通の字体（ローマン体）に戻ってしまうと、英語の言葉として認識されます。これは混乱や誤解の原因となります。例えば、shine（イタリック体＝日本語で「死ね」）のつもりが、 shine（ローマン体＝英語で「輝く（シャイン）」）に、同様に same は「鮫」のはずですが、 same「同じ（セイム）」と認識されます。

5）ハイフン、エンダッシュ、エムダッシュ、3 種それぞれの機能と記号

ハイフンは、語と語をつないで「複合語にする」最も短い横線（例：singer-songwriter）です。

エンダッシュ（en-dash）は、何頁から何頁、何年から何年までという、「範囲を表す」場合（例：pp. 24–31; 1914–1918）に使う、ハイフンより少し長い、大文字の N の横幅分の長さの記号です。

エムダッシュ（em-dash）は、「別の情報」—例えばこのような—を挿入するときに使う、大文字の M の横幅分の長さの記号です。

日本語フォント内にコピー&ペーストをすると、これらのハイフンやダッシュの文字が不適切なものに化けて意味が変わってしまうことがしばしば起こります。

記号	英文フォント 例：Times New Roman (〇)	日本語フォント 例：MS 明朝 (✕)
ハイフン	-	-
エンダッシュ	–	-
エムダッシュ	—	-

6）適切な段落表示（メディア別の詳細は『スタイルガイドライン』参照）

案内板や印刷物では、小見出し後の最初の行の文頭はインデント（字下げ）な

し、その後の段落は文頭にすべてインデントを設けます。インデントの幅が大きすぎても小さすぎても違和感を与えるため、正規の英文出版物を参照して適切な幅に調整します。

ウェブサイト、QR コード・テキスト等、ネット上の文章については、段落が変わるところで行を空けます。アキを 1 行以上設け、段落の区別が一目瞭然となるようにします。

例：

案内板と印刷物の適正な段落スタイル

Lorem Ipsum
Lorem ipsum dolor sit amet, consectetur adipiscing elit, sed do eiusmod tempor incididunt ut labore et dolore magna aliqua. Ut enim ad minim veniam, quis nostrud exercitation ullamco laboris nisi ut aliquip ex ea commodo consequat.

Duis aute irure dolor in reprehenderit in voluptate velit esse cillum dolore eu fugiat nulla pariatur. Excepteur sint occaecat cupidatat non proident, sunt in culpa qui officia deserunt mollit anim id est laborum.

Lorem ipsum dolor sit amet, consectetur adipiscing elit, sed do eiusmod tempor incididunt ut labore et dolore magna aliqua. Ut enim ad minim veniam, quis nostrud exercitation ullamco laboris nisi ut aliquip ex ea commodo consequat.

ウェブサイト、QR コード・テキスト等、デジタル・テキストの段落スタイル

Lorem Ipsum
Lorem ipsum dolor sit amet, consectetur adipiscing elit, sed do eiusmod tempor incididunt ut labore et dolore magna aliqua. Ut enim ad minim veniam, quis nostrud exercitation ullamco laboris nisi ut aliquip ex ea commodo consequat.

Duis aute irure dolor in reprehenderit in voluptate velit esse cillum dolore eu fugiat nulla pariatur. Excepteur sint occaecat cupidatat non proident, sunt in culpa qui officia deserunt mollit anim id est laborum.

Lorem ipsum dolor sit amet, consectetur adipiscing elit, sed do eiusmod tempor incididunt ut labore et dolore magna aliqua. Ut enim ad minim veniam, quis nostrud exercitation ullamco laboris nisi ut aliquip ex ea commodo consequat.

6 つのチェックリスト

□ 1 適切な欧文フォントを用いていますか（日本語フォントを用いていないことを確認）。
□ 2 行は左揃えになっていますか。
□ 3 元の原稿のフォーマット（イタリック体など）は、最終テキストに漏れなく反映されていますか。
□ 4 引用符、コンマ、コロン、アポストロフィは半角で表示されていますか。
□ 5 ハイフン、エンダッシュ、エムダッシュが正しい長さになっていますか。
□ 6 段落のインデントは適正でしょうか。

© SWET 2022

Available on the SWET website:

https://swet.jp/columns/article/Eibun_hyoki_wasurete_wa_naranai_mutsu_no_ruru/_C35

（文）レベッカ・ハーモン、リサ・ウィルカット、リン・リッグス、坂井基樹